豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

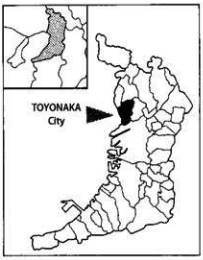
平成20年度（2008年度）

平成21年（2009年）3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成20年度（2008年度）



平成21年（2009年）3月

豊中市教育委員会

序　文

豊中市は、太古より猪名川・神崎川によって育まれた肥沃な平野や、千里丘陵にみる里山という好環境のもとに人々の生活の場が育まれました。そうした環境のもとで、現在まで多くの歴史的遺産を受け継いできたことを、81を数える市内の遺跡は物語っています。

その一方で、商都大阪や阪神工業地帯に隣接し、早くから大阪北郊のベッドタウンとしての開発が進められてきたため、埋蔵文化財の保護についても早急に取り組む必要にせまられようになりました。ここ数年、開発の勢いは落ち着いてきましたが、土地利用の形態が変化してきたことにより、小規模な開発や老朽化に伴う住宅の建て替えが増加する傾向にあり、埋蔵文化財の保護について迅速な対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性をふまえ、国の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。平成20年度に調査を実施した新免遺跡、岡町北遺跡、庄本遺跡、および各遺跡における確認調査に加え、平成19年度後期に実施した各遺跡における確認調査の成果も合わせて掲載しました。新免遺跡では弥生時代終末期の竪穴住居が確認され、また庄本遺跡では港湾集落の形成時期が椋橋荘が記録に現れる11世紀中頃に求められるようなるなど、新たな知見が得られました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代に暮らす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来のために役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、施工関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成21年（2009年）3月31日

豊中市教育委員会
教育長　山元行博

例　　言

1．本書は、平成20年度国庫補助事業（総額7,000,000円、国庫50%、市費50%）として計画、実施した埋蔵文化財緊急発掘調査にかかる概要報告書である。

2．平成20年度事業として、平成20年4月7日から平成21年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。

3．発掘調査は、本市教育委員会地域教育振興課文化財保護係が実施した。

4．本書のうち、Ⅱ～Ⅳ章はそれぞれ調査担当者が執筆した。また、第Ⅴ章は各調査担当者の見解をもとに、浅田が執筆した。なお、全体の編集を橘田が行なった。

5．各挿図に掲載した方位表記のうち、M.N.は磁北、また表記のないものは国土座標系（第Ⅵ系）に基づく座標北を示す。

6．挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 1994年版』に基づく。

7．挿図に掲載した出土遺物の縮尺は1：4、または1：3とする。

8．各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただきました。併せてここに明記し、深謝いたします。

平成20年度発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
新免遺跡	第61次	豊中市立花町1丁目150－6	65㎡	陣内 高志	平成20年（2008年）7月9日～8月12日
岡町北遺跡	第7次	豊中市岡町北2丁目66－28	26㎡	橘田 正徳	平成20年（2008年）7月14日～7月17日
庄本遺跡	第2次	豊中市庄本町1丁目95・995	281㎡	橘田 正徳	平成20年（2008年）10月6日～12月9日

目　次

第Ⅰ章　位置と環境　（橘田）

1．地理的環境 …… 1
2．歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　新免遺跡第61次調査　（陣内）

1．調査の経緯 …… 5
2．調査の概要 …… 6
（1）遺跡の概要と既往の調査 …… 6
（2）基本層序 …… 6
（3）検出した遺構と遺物 …… 6
3．まとめ …… 11

第Ⅲ章　岡町北遺跡第7次調査　（橘田）

1．調査の経緯 …… 13
2．発掘調査の成果 …… 13
（1）基本層序 …… 13
（2）検出した遺構と出土遺物 …… 14
3．まとめ …… 15

第Ⅳ章　庄本遺跡第2次調査　（橘田）

1．調査の経緯 …… 17
2．発掘調査の成果 …… 18
（1）基本層序 …… 18
（2）平安時代中～末期の遺構と出土遺物 …… 19
（3）戦国～江戸時代の遺構と出土遺物 …… 30
3．まとめ …… 37
（1）遺構の変遷 …… 37
（2）中世前期の庄本遺跡 …… 38
（3）中世末期～近世初期の庄本遺跡 …… 39

第Ⅴ章　確認調査の成果　（浅田）

確認調査の概要 …… 41

挿図・表目次

（第Ⅰ章　位置と環境）

第１図　市内遺跡分布図 …… 2
第２図　調査地点と周辺の地形 …… 4

（第Ⅱ章　新免遺跡第 61 次調査）

第３図　調査範囲図 …… 5
第４図　調査地位置図 …… 6
第５図　調査区平面・断面図 …… 7
第６図　竪穴住居１平面・断面図 …… 8
第７図　竪穴住居１出土遺物 …… 9
第８図　その他出土遺物 …… 10

（第Ⅲ章　岡町北遺跡第７次調査）

第９図　調査範囲図 …… 13
第 10 図　調査地位置図 …… 13
第 11 図　調査区平面・断面図 …… 14
第 12 図　出土遺物 …… 14

（第Ⅳ章　庄本遺跡第２次調査）

第 13 図　調査範囲図 …… 17
第 14 図　調査地位置図 …… 17
第 15 図　建物１出土遺物 …… 18
第 16 図　建物１平面・断面図 …… 19
第 17 図　調査区南壁面断面図（土層一覧） …… 20
第 17 図　第１遺構面平面・南壁面断面図 …… 21 ～ 22
第 18 図　第２遺構面平面図 …… 23 ～ 24
第 19 図　建物１－ SP2 遺物出土状況 …… 25
第 20 図　建物２平面・断面図 …… 25
第 21 図　SP16 遺物出土状況 …… 26
第 22 図　その他の柱穴出土遺物 …… 26
第 23 図　溝３～７出土遺物 …… 27
第 24 図　溝５～７断面図 …… 28
第 25 図　土坑 16 出土遺物 …… 28
第 26 図　落ち込み１・２出土遺物 …… 29

第 27 図　落ち込み 1 平面・断面図 ……29
第 28 図　土器溜まり 2 遺物出土状況 ……30
第 29 図　土器溜まり 1・2 出土遺物 ……30
第 30 図　水路 1 平面・断面図 ……31
第 31 図　水路 2 平面・断面図 ……31
第 32 図　水路 1 出土遺物 ……32
第 33 図　水路 2 出土遺物 ……32
第 34 図　土坑 5 出土遺物 ……32
第 35 図　土坑 5 ～ 7 平面・断面図 ……33
第 36 図　土坑 6 出土遺物 ……34
第 37 図　土坑 7 出土遺物 ……34
第 38 図　土坑 13 平面・断面図 ……35
第 39 図　土坑 13 出土遺物 ……36
第 40 図　井戸 1 出土遺物 ……36
第 41 図　その他の遺構出土遺物 ……36

（第Ⅴ章　確認調査の成果）

第 1 表　平成 20 年（2008 年）確認調査 一覧表 ……41 ～ 42
第 42 図　確認調査地点位置図 ……43
第 43 図　トレンチ掘削状況 ……44
第 44 図　トレンチ断面図 ……44
第 45 図　トレンチ掘削状況 ……44
第 46 図　トレンチ断面図 ……44
第 47 図　トレンチ掘削状況 ……45
第 48 図　トレンチ断面図 ……45
第 49 図　トレンチ掘削状況 ……45
第 50 図　トレンチ断面図 ……45
第 51 図　トレンチ掘削状況 ……46
第 52 図　トレンチ平面・断面図 ……46
第 53 図　トレンチ掘削状況 ……46
第 54 図　トレンチ断面図 ……46
第 55 図　トレンチ掘削状況 ……47
第 56 図　トレンチ断面図 ……47
第 57 図　トレンチ掘削状況 ……47
第 58 図　トレンチ断面図 ……47
第 59 図　トレンチ掘削状況 ……48
第 60 図　トレンチ断面図 ……48

第 61 図　トレンチ掘削状況 …… 48
第 62 図　トレンチ断面図 …… 48
第 63 図　トレンチ掘削状況 …… 49
第 64 図　トレンチ断面図 …… 49
第 65 図　トレンチ掘削状況 …… 49
第 66 図　トレンチ断面図 …… 49
第 67 図　トレンチ掘削状況 …… 50
第 68 図　トレンチ断面図 …… 50
第 69 図　トレンチ掘削状況 …… 50
第 70 図　トレンチ断面図 …… 50
第 71 図　トレンチ掘削状況 …… 51
第 72 図　トレンチ平面・断面図 …… 51
第 73 図　トレンチ掘削状況 …… 51
第 74 図　トレンチ断面図 …… 51
第 75 図　トレンチ掘削状況 …… 52
第 76 図　トレンチ平面・断面図 …… 52
第 77 図　トレンチ掘削状況 …… 52
第 78 図　トレンチ平面・断面図 …… 52
第 79 図　トレンチ掘削状況 …… 53
第 80 図　トレンチ平面・断面図 …… 53
第 81 図　トレンチ掘削状況 …… 53
第 82 図　トレンチ断面図 …… 53
第 83 図　トレンチ掘削状況 …… 54
第 84 図　トレンチ断面図 …… 54
第 85 図　トレンチ掘削状況 …… 54
第 86 図　トレンチ断面図 …… 54
第 87 図　トレンチ掘削状況 …… 55
第 88 図　トレンチ断面図 …… 55
第 89 図　トレンチ掘削状況 …… 55
第 90 図　トレンチ断面図 …… 55
第 91 図　トレンチ掘削状況 …… 56
第 92 図　トレンチ断面図 …… 56
第 93 図　トレンチ掘削状況 …… 56
第 94 図　トレンチ断面図 …… 56
第 95 図　トレンチ掘削状況 …… 57
第 96 図　トレンチ断面図 …… 57
第 97 図　トレンチ掘削状況 …… 57

第 98 図　トレンチ断面図 …… 57
第 99 図　トレンチ掘削状況 …… 58
第 100 図　トレンチ断面図 …… 58
第 101 図　トレンチ掘削状況 …… 58
第 102 図　トレンチ断面図 …… 58
第 103 図　トレンチ掘削状況 …… 59
第 104 図　トレンチ断面図 …… 59
第 105 図　トレンチ掘削状況 …… 59
第 106 図　トレンチ断面図 …… 59
第 107 図　トレンチ掘削状況 …… 60
第 108 図　トレンチ断面図 …… 60
第 109 図　トレンチ掘削状況 …… 60
第 110 図　トレンチ断面図 …… 60
第 111 図　トレンチ掘削状況 …… 61
第 112 図　トレンチ断面図 …… 61
第 113 図　トレンチ掘削状況 …… 61
第 114 図　トレンチ断面図 …… 61
第 115 図　トレンチ掘削状況 …… 62
第 116 図　トレンチ断面図 …… 62
第 117 図　トレンチ掘削状況 …… 62
第 118 図　トレンチ断面図 …… 62
第 119 図　トレンチ掘削状況 …… 63
第 120 図　トレンチ断面図 …… 63
第 121 図　トレンチ掘削状況 …… 63
第 122 図　トレンチ断面図 …… 63
第 123 図　トレンチ掘削状況 …… 64
第 124 図　トレンチ断面図 …… 64
第 125 図　トレンチ掘削状況 …… 64
第 126 図　トレンチ断面図 …… 64
第 127 図　トレンチ掘削状況 …… 65
第 128 図　トレンチ断面図 …… 65
第 129 図　トレンチ掘削状況 …… 65
第 130 図　トレンチ断面図 …… 65
第 131 図　トレンチ掘削状況 …… 66
第 132 図　トレンチ断面図 …… 66
第 133 図　トレンチ掘削状況 …… 66
第 134 図　トレンチ断面図 …… 66

第 135 図　トレンチ位置図 …… 67
第 136 図　トレンチ断面図 …… 67
第 137 図　トレンチ掘削状況 …… 67
第 138 図　トレンチ断面図 …… 67
第 139 図　トレンチ掘削状況 …… 68
第 140 図　トレンチ断面図 …… 68
第 141 図　トレンチ掘削状況 …… 68
第 142 図　トレンチ断面図 …… 68
第 143 図　トレンチ掘削状況 …… 69
第 144 図　トレンチ断面図 …… 69
第 145 図　トレンチ掘削状況 …… 69
第 146 図　トレンチ断面図 …… 69
第 147 図　トレンチ掘削状況 …… 70
第 148 図　トレンチ断面図 …… 70
第 149 図　トレンチ掘削状況 …… 70
第 150 図　トレンチ断面図 …… 70
第 151 図　トレンチ掘削状況 …… 71
第 152 図　トレンチ平面・断面図 …… 71
第 153 図　トレンチ掘削状況 …… 71
第 154 図　トレンチ断面図 …… 71
第 155 図　トレンチ掘削状況 …… 72
第 156 図　トレンチ断面図 …… 72
第 157 図　トレンチ掘削状況 …… 72
第 158 図　トレンチ断面図 …… 72

図版目次

図版1　新免遺跡第61次調査

（1）遺構検出状況（東半部）
（2）遺物出土状況（遺物包含層上）

図版2　新免遺跡第61次調査

（1）遺構完掘状況（東端部）
（2）竪穴住居1完掘状況（南から）

図版3　新免遺跡第61次調査

（1）遺構完掘状況（西半部）
（2）竪穴住居1遺物出土状況

図版4　新免遺跡第61次調査

（1）竪穴住居1埋土堆積状況
（2）竪穴住居1柱穴1断面

図版5　岡町北遺跡第7次調査

（1）調査区全景
（2）井戸1断面

図版6　岡町北遺跡第7次調査

（1）調査区東壁（土坑1）断面
（2）土坑1出土遺物

図版7　庄本遺跡第2次調査

（1）1区第2遺構面全景
（2）2区第2遺構面全景

図版8　庄本遺跡第2次調査

（1）建物1SP2遺物出土状況1
（2）建物1SP2遺物出土状況2

図版9　庄本遺跡第2次調査

（1）建物1SP1遺物出土状況
（2）土器溜まり2遺物出土状況

図版10　庄本遺跡第2次調査

（1）SP16遺物出土状況（上層）
（2）SP16遺物出土状況（下層）

図版11　庄本遺跡第2次調査

（1）溝3遺物出土状況1（土器1）
（2）溝3遺物出土状況2（土器2）

図版12　庄本遺跡第2次調査

（1）溝5断面
（2）落ち込み1断面

図版13　庄本遺跡第2次調査

（1）1区第1遺構面全景
（2）2区第1遺構面全景

図版14　庄本遺跡第2次調査

（1）土坑6断面
（2）土坑13断面（第2遺構面から下）

図版15　庄本遺跡第2次調査

（1）水路1断面
（2）水路2断面

図版16　庄本遺跡第2次調査出土遺物1

（1）第15図3　越州窯系青磁I類碗

図版17　庄本遺跡第2次調査出土遺物2

（1）第15図6
（2）第23図1
（3）第22図3

図版 18　庄本遺跡第２次調査出土遺物３

（１）第 22 図２
（２）第 37 図６・水路１出土同一個体片

図版 19　庄本遺跡第２次調査出土遺物４

（１）第 34 図３
（２）第 36 図４
（３）第 32 図１
（４）第 39 図３
（５）第 37 図４

図版 20　庄本遺跡第２次調査出土遺物５

（１）第 37 図１
（２）第 37 図２
（３）第 37 図３

図版 21　庄本遺跡第２次調査出土遺物６

（１）第 34 図１
（２）第 41 図２・第 37 図５

図版 22　庄本遺跡第２次調査出土遺物７

（１）第 32 図７・５（外面）
（２）第 32 図７・５（内面）

第Ⅰ章　位置と環境

1．地理的環境

豊中市は旧国で摂津国に属し、西は猪名川を挟んで兵庫県と、また南は神崎川を挟んで大阪市に接する。その市域の西・南を画する二つの河川は豊中市南西端で合流し、そして大阪湾へと注ぎ込む。そうした神崎川河口一帯は、古くより瀬戸内水運と神崎川・淀川水運が交接する流通上の要衝であり、その後背部に位置する豊中市は、古くから水運等による広域流通網の恩恵を受けて発展してきた。さらに、17世紀以降は都市大坂近郊という環境のもと、市域の農村は商品作物の栽培を行うことで極めて安定的に展開する。そして、明治43年の箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄宝塚線）開通を契機に宅地化が進み、現在では約38㎢の市域に約40万人が暮らす北摂有数の住宅都市となっている。その一方で、商業都市大阪の近代化とともに、その玄関口にあたる本市には名神高速道路や阪神高速道路といった幹線道路や大阪国際空港など、陸空の交通機関が整備された。関西国際空港が建設された現在においても、なお近代交通網における要衝の位置にあると言えよう。

一方、豊中市域の地形的特徴をみると、北から南に向かって標高が低くなること、全体的に起伏が乏しいことが指摘できる。市内北部の最高地点である島熊山（海抜約100ｍ）から最も低い大島町付近（海抜１ｍ以下）にかけての高低差は、およそ100ｍにとどまる。その市北部には千里丘陵と刀根山丘陵と呼ばれる２つの丘陵（高～中位段丘）、中部は主に千里丘陵から派生する中～低位段丘を中心とする豊中台地、南西部は神崎川・猪名川、その支流である犬井川などの小河川の沖積作用によって形成された平野部が広がるとおり、巨視的にみて三つの地形に区分できる。

なお、平野部については、庄本から高川河口を結ぶ京街道を境に、その南は条里未施工地帯となっており、地割りの形態によって細分できる。また、天竺川遊水池である字「鯉ヶ淵」や庄本北東の字「西大寺」から旧猪名川へ流れ込む埋没河川が知られるように、現在は平坦である平野南部も、かつては複雑な地形環境にあったと言える。

ところで、今回報告する３遺跡のうち、新免遺跡と岡町北遺跡は通称豊中台地と呼ばれる段丘上に立地し、庄本遺跡は市南部一帯に広がる平野部の中でも、神崎川と旧猪名川の合流点に形成された砂堆に立地する。

2．歴史的環境

ここでは今回報告するそれぞれの遺跡について、集落の動向を中心に述べていく。

新免遺跡・岡町北遺跡　二つの遺跡は、豊中台地上に位置する弥生～古墳時代の集落遺跡として知られている。豊中市域における弥生集落は、山ノ上遺跡のように弥生前期のうちに低地から台地上に進出し、中期になって本格的に展開するようになる。千里川流域の弥生集落としては、新免遺跡がその好例として挙げられる。新免遺跡は、多数の竪穴住居によって構成された集落域と方形周溝墓からなる墓域を有する大型の集落で、弥生中期から本格的に展開した後は、その領域を継続的に拡大させていく。弥生中期後半になると、その周辺に位置する本町遺跡や岡町北遺跡において、小規模な集落が出現する。これら中期後半に出現する小集落は、新免集落からの分村となる可能性

1. 北條明古墳群
2. 国府台駅南方遺跡
3. 国府遺跡
4. 弥生台（国府）遺跡
5. 分向遺跡
6. 荒蒔神社裏遺跡（向原）
7. 荒蒔神社遺跡
8. 荒蒔神社裏遺跡（向原）
9. 荒蒔神社西遺跡
10. 根郷下遺跡
11. 内宿遺跡
12. 仲間遺跡
13. 北下根遺跡
14. 根下谷遺跡
15. 武蔵国府関連遺跡
16. 武蔵国府
17. 武蔵国府関連遺跡
18. 宮町遺跡
19. 新宿遺跡
20. 府中遺跡
21. 御殿山遺跡
22. 大国魂神社
23. 宮西遺跡
24. 御殿山遺跡
25. 白糸台Ⅲ
26. 新宿御殿山遺跡
27. 白糸台遺跡
28. 本町遺跡
29. 新宿遺跡
30. 四谷遺跡
31. 武蔵国府関連遺跡
32. 北谷Ⅰ遺跡
33. 都営武蔵台
34. 北谷遺跡
35. 武蔵国府関連遺跡
36. 関戸遺跡
37. 関戸南遺跡
38. 宅地造成地
39. 下宿遺跡
40. 金剛寺遺跡
41. 神社遺跡
42. 旭遺跡等地
43. 大国魂神社等周辺遺跡
44. 武蔵国府跡
45. 武蔵国府跡
46. 都営武蔵野
47. 武蔵国府跡（推定）
48. 関戸遺跡
49. 寺町遺跡
50. 寺町遺跡
51. 紅葉ヶ丘遺跡
52. 宮西遺跡
53. 都立武蔵野
54. 寺町遺跡
55. 関戸遺跡
56. 関戸遺跡
57. 宮町遺跡
58. 武蔵野台
59. 武蔵野遺跡
60. 寺町遺跡
61. 寺町遺跡
62. 寺町遺跡
63. 寺町遺跡
64. 新宿遺跡
65. 宮町遺跡
66. 府中遺跡
67. 旭遺跡
68. 新宿御殿山
69. 小野遺跡
70. 武蔵国府関連遺跡
71. 北谷遺跡
72. 小野遺跡
73. 武蔵国府関連遺跡
74. 武蔵国府関連遺跡
75. 武蔵国府関連遺跡
76. 武蔵国府関連遺跡
77. 清水谷ブック遺跡
78. 高倉遺跡
79. 府内遺跡
80. 高倉遺跡
81. 根木遺跡

第１図　市内遺跡分布図

が考えられている。その小集落は、弥生終末期まで展開することが確認できるものの、それ以後の状況はまだ十分把握されていない。

一方、新免遺跡は弥生終末期まで拡大し続けるが、古墳前期になると急激に集落の規模が縮小するためか、その実態は一時的にわからなくなる。

しかし、桜井谷窯跡群が操業する古墳中期後半から、新免遺跡は再び活況を呈するようになり、後期には本町遺跡とともに盛期を迎える。この時期の遺構からは、窯体そのものやそれが融着した須恵器が多く出土するように、集落では桜井谷窯跡群で生産された須恵器の選別などが行われたと言え、当遺跡は本町遺跡とともに須恵器集散地として展開する。また、第57次調査で検出された建物1の柱穴は、本町遺跡第30次調査で検出された居館の一部と推定される庇付き建物とほぼ同じ規模を有する（豊中市教委 2004）。第57次調査区周辺の状況はまだ明確ではないが、6世紀後半までに居館を中心とする集落が形成されていたと考えられる。

一方、この時期には本町北遺跡においても、再び集落が展開するようになるが、その実態はまだ不明である。ただし、これまで調査された集落関連遺構を見る限り、新免遺跡のような須恵器集散地として展開した可能性は乏しい。

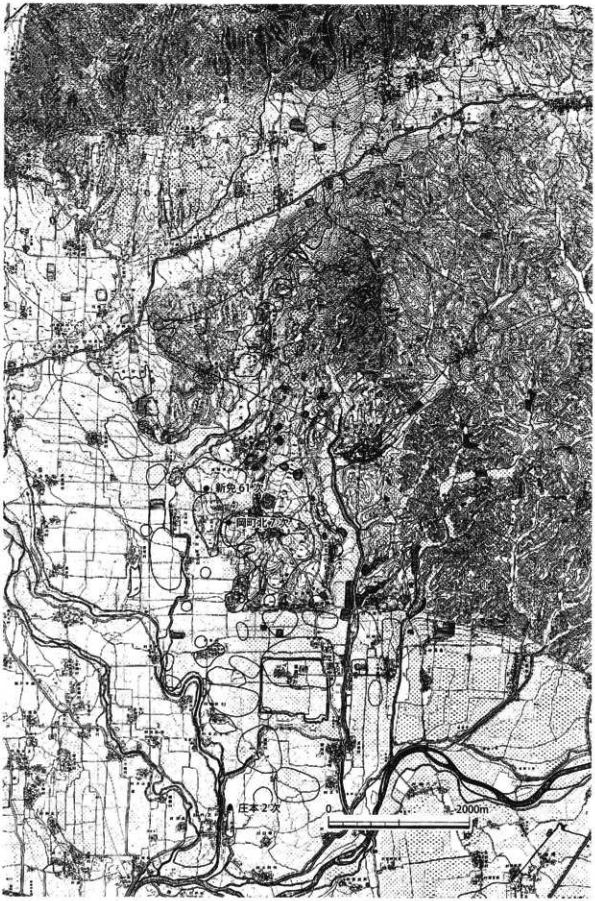
新免遺跡は8世紀まで安定的に継続し、また岡町北遺跡もその可能性が考えられるが、9世紀には集落は解体し、その後は散村が展開するようになる。

庄本遺跡　旧猪名川と神崎川の合流点に位置する当遺跡は、河尻の一角を構成する中世の港湾集落として知られている。南北に細長い集落の南端部で行われた第1次調査（豊中市教委 2004）では、12世紀にはじまる石鍋再加工工房、集落東方に広がる入江や大型水路が確認され、商職人が集住する港湾集落の一部が明らかになった。そうした集落は、今回報告するとおり、椋橋荘が史料に初見する11世紀中頃に、中世前期の流通拠点固有の集落形態である集村として成立する。第1次調査では、西日本各地からもたらされた搬入供膳具が多数出土したが、このことは瀬戸内水運などの広域水運網と連接する流通網が庄本遺跡に及んだことを示す。

ところで、神崎川河口一帯のことを中世では河尻というが、これまで河尻については文献史学によって瀬戸内水運と平安京を上流とする神崎川・淀川水運の結節点として説明されてきた。しかし、近年和泉型瓦器椀や屋敷墓などの分布から中世前期の流通にかかる諸特徴が明らかにされた結果、河尻が瀬戸内水運の東極として位置付けられるようになった。一方、平安京については瀬戸内沿岸部から一方的に物資が遡上するだけで、京都産土器供膳具が瀬戸内沿岸部で搬入供膳具として出土しないように瀬戸内に向けた直接的な流通は考古学的に確認できないことが知られるようになった。さらに文献史学は、荘官層の都鄙往来から平安京中心の流通が活発であったことを明らかにしようとしているが、そうした事実があったとしても、それが搬入供膳具に示された河尻・瀬戸内間で行われた双方向型流通の活況に対比できるほど、評価されるものではないことも明確になっている。

このように、瀬戸内水運は河尻を東極とする双方向型の流通関係によって成立しており、河尻の存在意義はこれまで説明されたような単なる結節点にとどまるものではない。その上で、庄本遺跡が椋橋荘の流通拠点であることをふまえて、椋橋荘・長江荘が承久の乱の発端になったことの要因は改めて検討される必要に迫られている。

【参考文献】豊中市教委　2004『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　平成15年度（2003年度）』

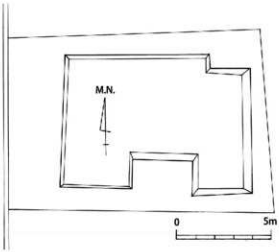


第２図　調査地点と周辺の地形

第Ⅱ章　新免遺跡第 61 次調査

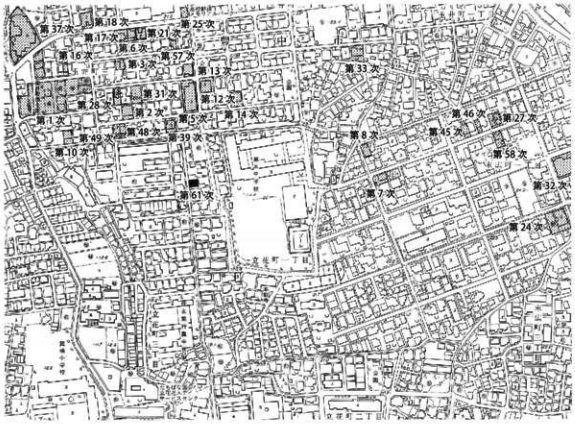
1．調査の経緯

当調査区は、豊中市立花町１丁目 150 － 6 に所在する。平成 20 年 5 月 27 日に提出された埋蔵文化財発掘の届出に基づいて、平成 20 年 6 月 16 日に確認調査を行ったところ、地表下約 48 ㎝で遺物包含層を検出し、同じく 70 ㎝で遺構面を確認した。申請地では個人住宅の建築が予定されていたが、基礎工事に伴う表層地盤改良が地表下 150 ㎝まで達することから、遺構の損壊は免れず、事業主と協議した結果、本調査を実施することになった。なお、今回は廃土置場を確保するため、反転調査を行った。



第３図　調査範囲図（1/200）

本調査は平成 20 年 7 月 9 日から平成 20 年 8 月 12 日にかけて実施し、建物の基礎掘削範囲となる 65 ㎡を対象に実施した。



第４図　調査地位置図（1/5,000）

2．調査の概要

（1）遺跡の概要と既往の調査

新免遺跡は阪急宝塚線豊中駅の西～南西一帯の住宅地に広がる集落遺跡であり、東西約 600 m、南北約 300 mの範囲に広がる。これまでに 60 次の発掘調査が実施され、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが判明している。遺跡の盛期は弥生時代中期～後期、古墳時代後期とみられ、なかでも弥生集落は多数の竪穴住居と方形周溝墓を有する市内有数の拠点集落に位置付けられている。しかし、当遺跡における発掘調査は、個人住宅の新築工事を契機とする小規模な調査が多く、共同住宅等の建築に伴う比較的大規模な調査は極めて少ない。このことから、遺跡の全体像を包括的に検討することはまだ困難であり、市内最多の調査次数にも関わらず、今なお当遺跡における集落の動態は不明瞭なところが多い。

ところで、今回の調査地は遺跡南西部、南接する山ノ上遺跡との境界付近に位置する。調査地周辺では、過去の確認調査で弥生時代～古墳時代の遺物包含層・遺構が検出されていたが、本格的な発掘調査は行われていなかったため、集落の具体像は明確にはされていなかった。よって、今回の調査では遺跡南西部における集落の動態が、はじめて把握できるものと期待された。

（2）基本層序

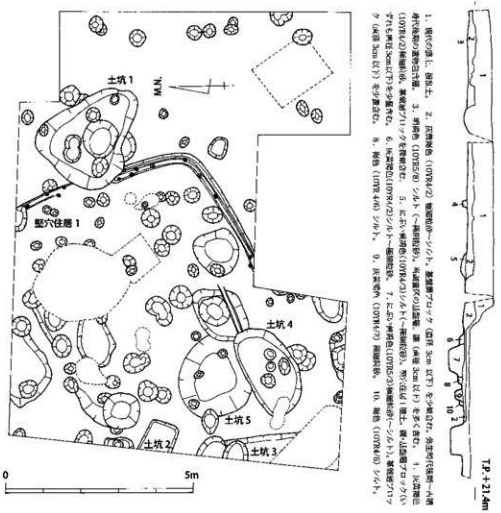
今回の調査地は厚さ 30 cm程の盛土直下で、弥生時代後期～古墳時代後期の遺物包含層（にぶい黄褐色極細粒砂～シルト層）を検出した。ただし、一部で盛土と遺物包含層の間に耕作土とみられる褐灰色極細粒砂を確認していることから、中近世の堆積土層はすでに削平されているものと推測される。遺物包含層は、平均 10 cm程度の層厚を有する。出土した遺物の大半は砕片で、表面が摩滅している。よって、これらの遺物は原位置を保っていないと推定される。また遺物に占める弥生時代後期～終末期の土器の割合が非常に高いことを付記しておく。遺物包含層下は当調査地の基盤層である橙色シルト（～極細粒砂）であるが、西側にむかって徐々に極細粒砂へと変化する。なお、基盤層上面は調査区東西間で約 10 cmしか比高差がなく、ほぼ平坦と言える。

ところで、遺構の一部は遺物包含層中から掘り込まれているが、遺構埋土と遺物包含層の土質が類似しているため、包含層上面では両者の識別が困難であった。このため、今回は基盤層上面において遺構検出を行い、調査を実施した。

（3）検出した遺構と遺物

今回の調査では 65 ㎡という限られた面積にも関わらず、第 5 図に示すとおり、竪穴住居 1 基、柱穴約 110 基、土坑 13 基など、多くの遺構を検出した。このうち、柱穴については 100 基以上検出したとおり、その検出数から相当数の掘立柱建物や竪穴住居が存在したと考えられる。しかし、調査範囲が限定されているため、それぞれの柱穴から建物を復元することは困難と判断した。以上の調査・検討経過をふまえつつ、主要な遺構・遺物について報告を行う。

竪穴住居 1　調査区中央でほぼ全体を検出した。隅丸方形の平面形を呈する住居で、一辺約 4.7

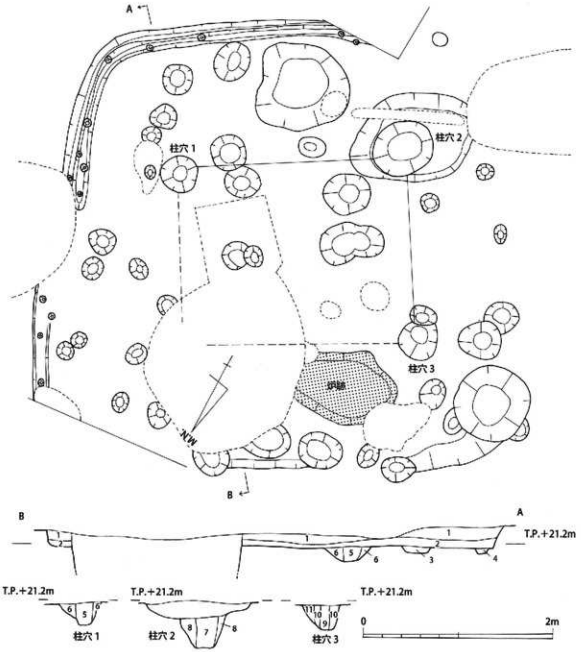


第5図　調査区平面・断面図（1/80）

mをはかる。最も残存状況の良好な南辺で、深さ20cmをはかる。基底面直上には、明黄褐色極細砂を主体に基盤層ブロックを多量に含む厚さ数cmの土層が堆積するが、その特徴から当該住居の貼り床と考えられる。貼り床を除く住居埋土は上下2層に分層される。上層はにぶい黄褐色極細粒砂、下層は褐色極細粒砂をそれぞれ主体とする。いずれも比較的似通った土質であるが、上層は下層よりも礫（直径2cm前後）や、基盤層ブロック（直径3cm未満）を多く含む点で異なる。ところで、基底面直上（貼り床）から出土した遺物と住居内の覆土から出土した遺物に、明確な時期差は認められなかった。このことから、当該住居は廃絶した後、比較的短期間のうちに埋没したものと推定される。

竪穴住居の主柱穴としては柱穴1～3が比定でき、その配置状況から4本と考えられる。しかし、その一つは近現代の井戸によって削平されたものと考えられる。各柱穴の間隔は柱芯間でほぼ2mをはかる。主柱穴のうち1・3の深度は25cmをはかるが、直径がひと回り大きい柱穴2だけが40cmと、他よりも深く掘削されている。

住居基底面の壁際には幅10cm前後、深度5cm前後の壁溝が断続的にみとめられる。壁溝の基底面において、直径5～10cm、深度10cm未満の小穴が一定の間隔を置いて検出されている。これ



1．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂（～シルト）。礫を少量含む。基盤層ブロック（直径 3cm 以下）を若干含む。住居上層埋土。　2．にぶい褐色（10YR4/3）極細粒砂。礫（直径 2cm 以下）を微量含む。基盤層ブロック（直径 3cm 以下）を微量含む。住居下層埋土。※2層直下に明黄褐色（10YR6/6）極細粒砂が薄く堆積する。非常に堅くしまっている。貼床土。　3．褐色（10YR4/4）極細粒砂。基盤層ブロックを微量含む。　4．暗褐色（10YR3/4）細粒砂～極細粒砂。住居壁溝埋土。　5．黒褐色（10YR2/3）細粒砂～極細粒砂。　6．にぶい褐色（10YR4/3）細粒砂～極細粒砂　7．黒褐色（10YR3/2）極細粒砂～シルト。基盤層ブロック少量含む。　8．にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂。基盤層ブロック少量含む。　9．灰黄褐色（10YR4/2）極細粒砂。基盤層ブロック多く含む。　10．にぶい黄褐色（10YR4/3）極細粒砂。基盤層ブロック少量含む。　11．褐色（10YR4/4）極細粒砂。基盤層ブロックを微量含む。

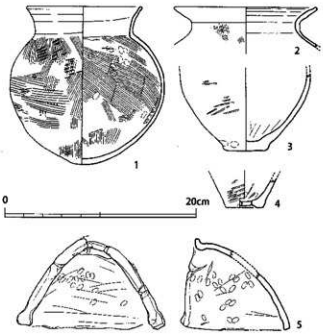
第6図　竪穴住居1平面・断面図（1：40）

らの小穴は多くが断面「V」または「U」字の形状を呈しており、住居の屋根あるいは壁材を支える部材が設置されていたと考えられる。

住居の北側、柱穴3の東側において炉跡が検出された。炉跡は検出面で最大幅 50 ㎝、最大深度 18 ㎝をはかるが、東西両端付近は撹乱によって削平されていることから、正確な形状は不明である。基底面は多少の高低差を有するものの、平坦面を形成する。炉の周囲は被熱して変色していた。そ

の範囲はスクリーントーンで示したとおりであるが、撹乱の位置をふまえると炉跡を全周するものとみられる。炉内の堆積土は黒褐色極細粒砂を主体とし、焼土ブロックや炭化物を多く含む。

出土遺物（第7図）　竪穴住居内からは多くの弥生土器が出土したが、大半が砕片で、図化できた遺物は少ない。



第7図　竪穴住居1出土遺物（1：4）

1・2はともに柱穴2から出土した甕形土器である。1は口径12㎝に復元され、器高16.6㎝をはかる。口縁部はゆるやかに外半する形状で、端部は丸く収まる。底部はやや尖り気味の丸底である。外面はタタキの後に粗いハケを施すが、タタキの痕跡が随所に確認できる。なお、体部上半と下半は縦方向のハケを、中部には横方向のハケが施される。また、体部内面は横方向のハケを施すが、一部に押圧痕が認められる。体部下半を中心に、外面には炭化物が付着している。2は、検出時は全体の形状が視認できる状況で出土したが、非常に脆弱であったため、十分に復元できなかった。このため、口縁部から頸部にかけて図化しただけにとどまる。2の口径は15㎝に復元される。口縁端部は横ナデが強く施され、器壁は薄くなっている。また外面の一部で縦方向のハケ調整が確認できるが、全体的に摩耗しており、それ以外の調整は明確ではない。なお、検出時の所見であるが、2も1と同じく尖り気味の底部を有していたことを付記する。3の底部片は、外面に煤が付着することから、小形の甕形土器と推定される。底部径4㎝、残存高8.2㎝をはかる。内外面ともに摩滅が著しいため、調整は不明瞭であるが、体部外面の一部に右上がりのタタキが確認できる。また底部外面には、葉脈の圧痕がみとめられる。4は、住居東側の床面付近から出土した鉢形土器の底部片である。底部径は3.8㎝、残存高3.1㎝をはかる。底部中央の穿孔は、焼成前を施されたものである。内外面ともに摩滅しているものの、体部外面には右上がりのタタキが確認できる。5は住居南端の床面上で、小形甕形土器片（第7図3）とともに出土した。特異な形態を呈するが、手焙形土器の一部（蔽部）と考えられる。蔽部のうち、鉢部との結合部は破断しておらず、完結している。よって、鉢部とは分割して成形されたと判断される。蔽部の高さは9.6㎝、最大幅15.5㎝をはかり、ほぼ垂直に開く開口部であったとみられる。外面はハケ調整の後にナデを、内面は板状工具によるナデを施すだけで、何ら加飾された形跡は認められない。手焙形土器としては、全体的に粗雑な印象を受ける。

これら住居内出土遺物のうち、1が庄内式併行期の在地土器であること、また5は小型化、粗雑化した末期の手焙形土器であることから、弥生時代終末期後半～末の所産と言える。

以上の所見より、竪穴住居1は弥生時代終末期後半に機能し、出土遺物の時期幅からみて、その廃絶から埋没に至る過程も当該時期内に収まるものと考えられる。

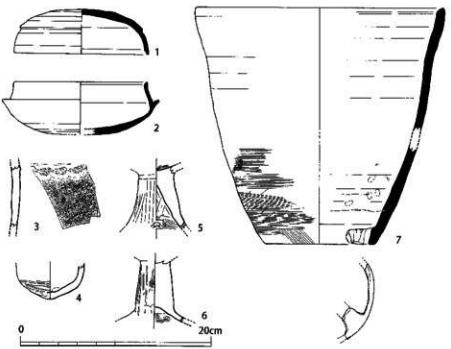
土坑1　土坑1は竪穴住居1東辺に位置し、一部は住居と重複する。土坑の平面形は、隅丸方形あるいは楕円形の形状が考えられ、長軸長180㎝、短軸長150㎝、最大深度25㎝をはかる。断面の形状はゆるやかなすり鉢状を呈する。出土遺物の中に占める弥生土器の量は非常に多いものの、古墳時代後期の須恵器も含まれることから、土坑1は古墳時代後期に機能したものとみられる。

土坑2　調査区西端で検出した土坑である。一部は調査区外に広がることから、正確な規模・形状は確定できないが、検出部分から長方形の平面形状と考えられる。また、その規模は短辺60㎝、長辺は90㎝以上、深度は5㎝程度をはかる。土坑は、ほぼ平坦な基底面から垂直に近い掘り方で、箱状の断面形を呈する。断面観察では有機物等の痕跡はみとめられず、土坑2の性格は不明である。埋土中から外面にタタキ技法を施した弥生土器砕片が出土しており、当該土坑は弥生時代後期～終末期頃のものと考えられる。

土坑3　調査区の南西端部で検出した土坑であるが、その大部分は調査区外に伸びているため、全体像は明確にできない。検出部分では、一辺160㎝以上、深度10㎝程度をはかる。基底面は平坦である。その形状から、竪穴住居の一部となる可能性も考えられる。土坑3は埋土中から出土した遺物に、須恵器が含まれないことから、須恵器出現以前の所産となる可能性がある。

土坑4　調査区南西部で検出した、平面楕円形の土坑である。長軸長2m、短軸長1.3m、深度は約10㎝をはかり、基底面は比較的平坦である。出土遺物は非常に少量であったが、須恵器砕片を含んでいることから、当該土坑は古墳時代後期頃の所産と言える。

土坑5　調査区南西部、竪穴住居1柱穴3の西側で検出した土坑である。土坑の南側と東側の一部が、土坑4等によって削平されているが、平面楕円形状を呈するものと推定される。長軸長1.7m以上、短軸長1.5m、深度約0.4mをはかる。当該土坑は、竪穴住居1の西辺と重複するが、厳密な前後関係については不明である。ただし、土坑5の出土遺物に須恵器が全く含まれていないこ



第8図　その他出土遺物（1：4）

と、竪穴住居1の貼り床上面では遺構掘り方が検出されなかったこと、さらに竪穴住居1との位置関係に規則性が見い出しにくいことをふまえると、竪穴住居1以前の遺構と考えられよう。

その他の出土遺物（第8図）　先述のとおり、今回の調査では多数の遺構が検出された。しかし、出土遺物の多くは細かく割れており、図化できたものは少ない。よって、ここでは遺物包含層出土のものも取り上げ、今回触れることができなかった遺構の時期を推定する目安としたい。

1は須恵器杯蓋、2は須恵器杯身である。1は口径14.1㎝、器高4.7㎝をはかる。天井部と体部間の稜は比較的明瞭に成形されている。2は口径14.4㎝、器高5.2㎝をはかる。受部と口縁部の接合部には明瞭な凹線が確認できるが、口縁端部の段は緩やかで、やや不明瞭と言える。1・2はともに6世紀前半の時期幅に収まるものであろう。3は須恵器質の体部片で、韓式系土器の可能性も考えられる。器種、時期の詳細は不明である。外面に押圧によって凹凸を加えた特徴的な突帯が貼付されている以外に、文様や突帯はない。内外面ともに回転ナデが施されたものと考えられるが、極めて平滑に仕上げられているため、明確ではない。4は小形鉢あるいは壺とみられる。底部は尖底状を呈する。残存する体部の最大径は約7㎝、残存高3.8㎝をはかる。器壁は厚手である。内外面とも摩滅しているが、底部外面にヘラミガキ状の痕跡が確認できる。4は、残存部位が体部下半部だけに限られるため、その時期などの詳細は不明である。5・6はともに高杯脚部片である。5の脚部は中空で、6は中実である。ともに外面にはヘラミガキが施されている。また、いずれも坏部とは挿入付加法で接合されている。7は須恵器甕である。残存部分が少ないため、法量の復元に若干の疑問を残すが、口径26㎝、器高25㎝に復元される。底部には蒸気を通すための半月形状の孔が、2か所に施される。体部下半部の一部に煤が付着していた。古墳時代後期の所産とみられる。

これら遺物包含層中の出土遺物から、当該調査区では弥生時代後～終末期と古墳時代後期の、少なくとも2時期の遺構が存在すると言える。また、周辺における発掘調査・確認調査の成果をふまえると、今回出土した遺物のうち、時期が特定できなかったもののなかには、古墳時代前期のものが含まれる可能性は十分にある。これ以外に韓式系土器の可能性がある第8図3などもあり、弥生時代終末期から古墳時代後期にかけて、集落が継続する可能性も想定されよう。

3．まとめ

今回の調査は、これまで本格的な発掘調査が行われず、その具体像が把握されていない遺跡南西端部ではじめて実施されたものである。調査の結果、主に弥生時代後期～終末期、古墳時代後期頃の集落関連遺構を検出したが、特に弥生時代後期～終末期のものが圧倒的に多い。その一方で、中期に遡る遺構・遺物は確認できなかった。このことから、調査地周辺は弥生時代後～終末期に盛期を迎えると言える。これまで、新免遺跡における弥生集落の盛行期は中期、なかでも畿内第Ⅲ～第Ⅳ様式の時期と考えられていた。これに対して、当調査区周辺が弥生時代後期～終末期とやや遅れて盛期を迎える背景には、集落領域の変動などの要因が考えられよう。この問題は各調査区における遺構の時期等の傾向を把握した上で、改めて検討する必要があるだろう。

一方、古墳時代の遺構は後期の土坑1・4と少ない。これらの土坑以外に、古墳時代前期～中期の遺構が存在する可能性はあるものの、弥生後～終末期の集落と比較して明らかに衰退することが

指摘できる。

今回の調査によって、新免集落の動態について上記の見通しを述べた。もちろん、現時点では当調査区を中心とする所見にすぎないが、新免遺跡における弥生時代から古墳時代にかけての集落の変動を考える上で、大きな手がかりとなるだろう。よって、今後近隣における開発においては、埋蔵文化財の取り扱いについて、より一層留意する必要がある。

【参考・引用文献】（順不同）

阪急宝塚線豊中市内連続立体交差遺跡調査団・豊中市教育委員会 『新免遺跡－第 11 次発掘調査報告書－』 豊中市文化財調査報告第 22 集　1987

豊中市教育委員会 「新免遺跡第 28 次調査の概要」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1989 年度』豊中市文化財調査報告第 28 集　1989

豊中市教育委員会 「新免遺跡第 39 次調査の概要」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1991 年度』豊中市文化財調査報告第 31 集　1992

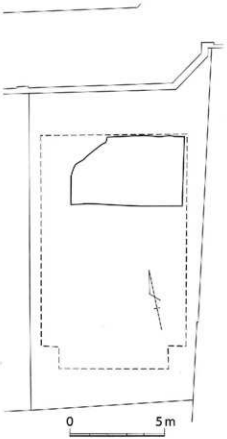
豊中市教育委員会 「新免遺跡 48・49 次調査の概要」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成 10 年度 (1998 年度)』 豊中市文化財調査報告第 45 集　1999

第Ⅲ章　岡町北遺跡第７次調査

１．調査の経緯

個人住宅建築に先立ち６月23日に確認調査を行ったところ、現地表下0.4m前後のところで遺構面を検出し、柱穴１基を確認した。また、側溝掘削時の立会調査でも、別に柱穴２基を確認した。

一方、施工業者によると、計画中の建物のガレージ部分に限って地表下1.0mまで掘削するということであり、この部分における遺構の損壊は避けられないことになった。このことから、協議を行った結果、ガレージ部分の掘削範囲となる26m^{2}を対象に、記録保存を行う必要から本調査を実施することになった。



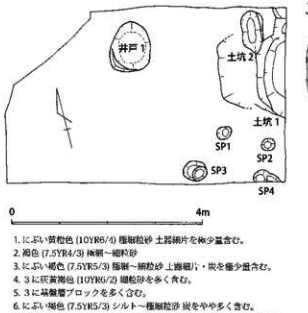
第９図　調査範囲図（１/200）

２．発掘調査の成果

（１）基本層序

当調査区では、現地表から約0.3～0.5m下のところで、段丘形成層となる明黄褐色細粒砂層を確認した。現地表面以下には、現状の宅地造成に伴う盛り土、その下には宅地化以

第10図　調査地位置図（１/5,000）



第 11 図　調査区平面・断面図（1/80）

前の耕作上・床土、遺物を含む褐灰色細粒砂層の順に堆積し、段丘形成層にいたる。ところで、今回の調査では、遺構はすべて段丘形成層上面で検出したが、その多くは褐灰色細粒砂層上面から掘削されたものである。

（2）検出した遺構と出土遺物

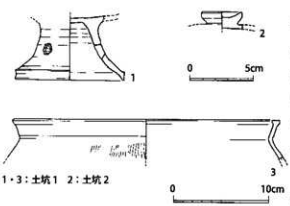
当調査区からは土坑 1 基・井戸 1 基・柱穴等を検出した。以下、各遺構について報告する。

土坑 1　調査区東端部で検出した浅い落ち込み状の土坑で、平面不整円形を呈する。調査区の東端で 2.7m 以上、深さ 40cm をはかる。埋土は 3 層に大別でき、上層は自然堆積層、中層の一部には基盤層ブロックを多く含む人為的な埋め戻し土が、下層には炭・焼土を含む灰褐色極細粒砂層が堆積する。遺物の多くは中層から出土した。出土した遺物は、第 12 図に掲載した。

1 は、須恵器脚部であるが、器種は明確ではない。裾部径 8.4cm、残存高 4.9cm をはかる。脚部中位の 3 方向にスカシが施される。スカシは円形ではなく、菱形を呈する。内外面ともに、回転ナデを施す。3 は、土師器甕である。口径 27.8cm、残存高 4.3cm をはかる。体部外面には粗いハケを、また口縁部から体部内面にかけて横ナデを施す。口縁端部は肥厚し、端部の上面はナデによって平坦に仕上げられている。

土坑 2　土坑 1 と重複して検出された。埋土は土坑 1 とほとんど変わらない。長軸長 0.9m、幅 0.4m、深さ 10cm 前後をはかる。土坑の基底面は攪拌されたような凹凸があり、平坦ではない。

土坑 2 からは、第 12 図 2 の須恵器のツマミが出土した。ツマミ径は 3.1cm、残存高 1.4cm をはかる。器種については明確ではない。



第 12 図　出土遺物（1・2：1/3　3: 1/4）

井戸 1　調査区中央で検出した素掘りの井戸で、平面楕円形を呈する。南北 1.05m、東西 0.85m をはかる。層下部は礫層の上、極めて堅緻であったため、完掘できなかった。層上部からは古墳時代後期の所産と考えられる須恵器細片が出土しているが、遺物の出土量が少ないため、時期を特定するまでにはいたらない。

柱　穴　4 基を検出した。調査区東部に偏在する。柱穴列には復元できなかったが、柱痕が明確に認

められることから、建物に伴うものと想定される。いずれの柱穴も直径 25cm 以上をはかる。

4．まとめ

岡町北遺跡における本格的な調査はまだ少なく、遺跡の状況は十分に把握できていない。特に、今回の調査区が位置する遺跡西端部については、その近辺で第 5 次調査が行われているものの、調査範囲が極めて限定されていたため、集落等の状況は明確にはされなかった。このような状況のもと、今回の調査では時期が特定できる遺構を検出した。このことによって、岡町北遺跡東部に古墳時代後期以降の集落が展開することが明らかになった。

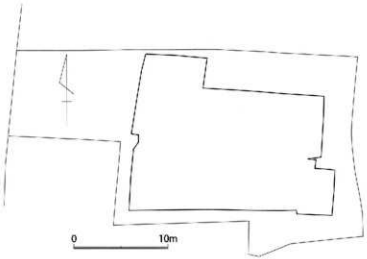
また、今回検出した遺構は調査区東部に偏在する傾向が認められることから、東方に建物群が存在することは容易に推定できる。よって、周辺における開発においては、集落の存在を特に留意する必要がある。

第Ⅳ章　庄本遺跡第２次調査

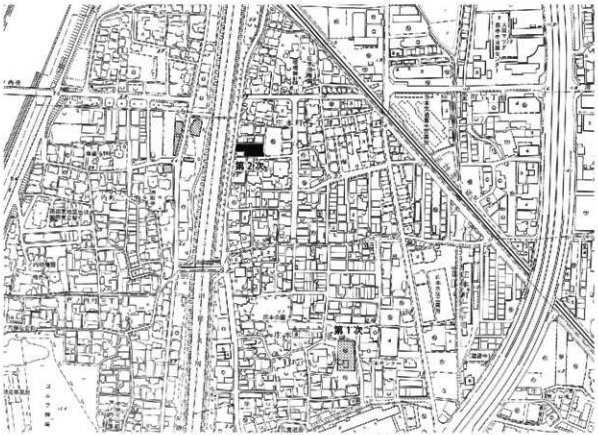
１．調査の経緯

当敷地に計画されている建物は鉄骨造３階建てで、基礎補強のために柱状地盤改良を行うことが事前協議において示されていた。

そこで、平成20年（2008年）９月２日に確認調査を行ったところ、現地表面下1.0mで戦国時代から江戸時代前期の遺構を、また1.7mで平安時代の遺構を検出するとともに、初期の肥前系磁器碗や瓦器碗が出土した。よって、協議を行った結果、これらの遺構が損壊することは避けられず、記録保存のための発掘調査を行うことになった。なお、建築申請者は零細な事業主にあたることから、発掘調査にあたってはその一部を国庫補助対象として行うことになった。



第13図　調査範囲図（1/400）



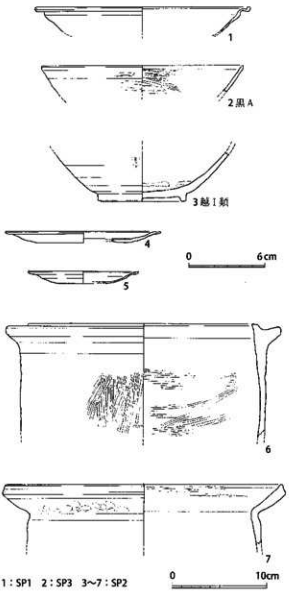
第14図　調査地位置図（1/5,000）

2．発掘調査の成果

（1）基本層序

当調査区では、現地表から約 1.7m 下のところで、庄本集落が立地する砂堆を形成する灰色中粒砂層を確認したが、当層にいたるまでには様々な土層が堆積する。これらの上層は、4 時期にわけて大きく変わる。よって、ここでは各時期の土層を第 1 ～ 4 層に区別し、これらの特徴について述べることにする。

第 1 層　表土から第 1 遺構面にいたる土層で、基本的には整地層によって構成されている。その整地層は三和土を多く含むもので、最低でも 3 層に細別される。また、これらの上面には近世以降の数時期にわたる遺構が掘削されているが、最新のものは近現代の所産となる。よって、第 1 遺構面からその上は、近世以降の建物の建て替えなどに伴う継続的な宅地の改変・造成を背景に、堆積したものと言える。



第 15 図　建物 1 出土遺物
（1～5：1/3　6・7：1/4）

第 2 層　第 1 遺構面の基盤層となるにぶい赤褐色～黄灰色極細粒砂層で、第 2 遺構面を覆う包含層までの堆積土である。4 層程度に細分できるが、各細分層の特徴に大きな違いはない。同層から出土した遺物は摩滅した瓦器・土師器に限られ、14 ～ 15 世紀にかけては耕地化していたものと考えられる。また、落ち込み 1・2 の堆積土も同層に含まれる。

第 3 層　第 2 遺構面を覆う遺物包含層と第 2 遺構面の基盤層となる一部の整地層をこれに比定する。遺物包含層の上面、その直下から古代後期～中世前期の遺構を検出している。また、調査区中央から西寄り（溝 4 ～建物 1 の周辺）にかけて、明黄灰色シルトブロックを多く含む灰色中粒砂層などが層厚 5 ㎝程度堆積する。これらの堆積土は、その特徴から砂堆の地上げを目的とした整地に伴うものと考えられる。

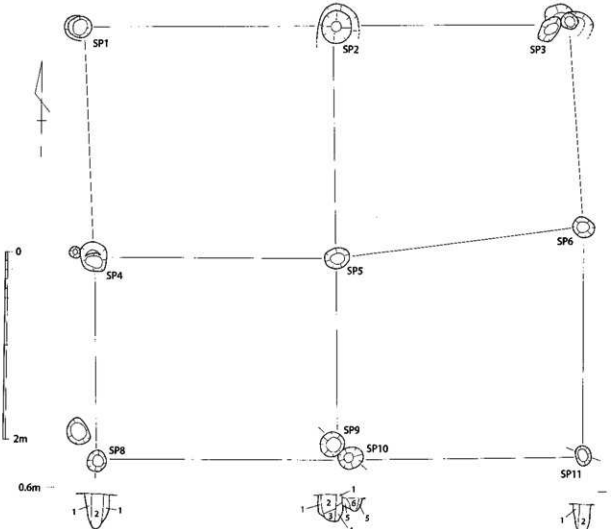
第 4 層　砂堆を構成する灰色中粒砂層であるが、検出面から約 50cm のところで、植物遺体を多く含む灰オリーブ色細粒砂層に変わる。このような土層は低湿地や止水環境で堆積するものであり、砂堆が形成される以前における庄本一帯の環境を示している。

（2）平安時代中～末期の遺構・出土遺物

第２遺構面からは、平安時代中～末期の建物・溝・土器溜まりなどの遺構を検出している。以下、これら検出した遺構の概略について述べる。

建物１　調査区北部で検出した南北２間（5.3m）、東西２間（4.6m）の総柱建物である。建物の主軸方向は、N－1°－Wである。柱穴の間隔は、柱心間で東西 2.65m、南北 2.25m 前後をはかる。検出部分における建物の面積は 24.4m^2 であるが、柱穴の配置からみて北側に１間以上広がる可能性がある。使用された柱は、各柱穴の断面観察から、直径 10 ～ 15cm と推定される。なお、SP1・２の柱痕部分からは、第 15 図に挙げる遺物がまとまって出土した。

１は SP1 から出土した「て」の字状口縁を有する土師器大皿である。口径 17.0cm に復元され、

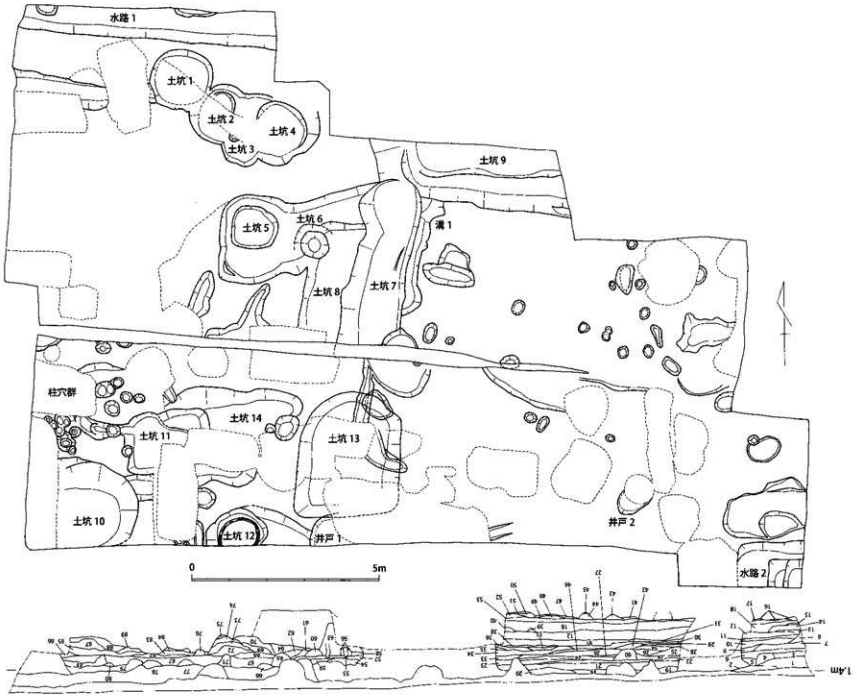


SP8　1. 灰色（5Y5/1）極細粒砂 基盤層ブロックを多く含む。
　　2. 灰色（5Y4/1）シルト～極細粒砂 層下面に木質粘土が残る。
SP9・10
　1. 暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト 基盤層ブロックを含む。
　2. 暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト 基盤層ブロックを多く含む。
　3. 黄灰色（2.5Y5/3）木質粘土（粘材が粘土化したもの。）
　4. 黄褐色（2.5Y5/3）中粒砂 基盤層ブロックを含む。
　5. 暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト 基盤層ブロックを少量含む。
　6. 黄灰黄色（2.5Y4/2）シルト 炭～中粒砂を含む。
SP11　1. 褐灰色（10YR5/1）極細～中粒砂 基盤層ブロックを多く含む。
　　2. 褐灰色（10YR5/1）シルトに極細粒砂を含む。 基盤層ブロックを少量含む。

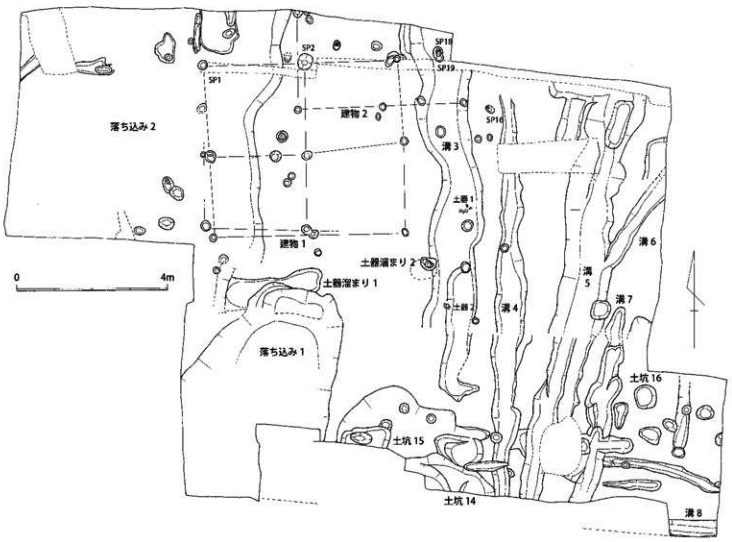
第 16 図　建物１平面・断面図（１/40）

1．にぶい黄色（2.5Y6/4）中～細粒砂　炭化物・三和土ブロックを含む。
2．にぶい橙褐色（10YR4/3）中～細粒砂　礫・三和土ブロックを含む。
3．灰黄褐色（10YR6/2）中～粗粒砂　炭化物・三和土ブロックを含む。
4．暗灰黄色（2.5Y4/2）細～中粒砂　炭化物を多く含む。基盤層ブロックを含む。
5．にぶい黄色（2.5Y6/4）中粒砂　炭化物を含む。
6．暗灰黄色（2.5Y4/2）中粒砂　粗粒砂を含む。炭化物を少量含む。
7．オリーブ褐色（2.5Y4/3）細～極細粒砂　中粒砂を含む。基盤層ブロックを少量含む。
8．暗灰黄色（2.5Y4/2）細～極細粒砂　基盤層ブロックを含む。
9．暗灰黄色（2.5Y4/2）中～細粒砂　同色シルトブロック・基盤層ブロックを含む。
10．暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）細～極細粒砂
11．にぶい黄褐色（10YR4/4）中粒砂　三和土ブロックを少量含む。
12．褐灰色～灰黄褐色（10YR5/1～5/2）シルト～極細粒砂
13．褐灰色（10YR5/1）細粒砂～シルトに中粒砂を含む。礫・基盤層ブロックを含む。
14．褐灰色（10YR6/1）シルトに中粒砂を多く含む。礫を極少量含む。
15．灰色（5Y4/1）中粒砂　粗粒砂を多く含む。
16．オリーブ褐色（2.5Y4/4）細～極細粒砂　炭化物を極少量含む。
17．オリーブ褐色（2.5Y4/4）極細粒砂　基盤層ブロック極少量含む。
18．明黄褐色（10YR6/8）中～極細粒砂　基盤層ブロック極少量含む。
19．にぶい黄褐色（10YR5/4）中～細粒砂　三和土ブロック・礫を少量含む。
20．暗黄褐色（10YR4/2）中粒砂　礫・三和土ブロックを多く含む。
21．黄褐色（2.5Y5/3）中～細粒砂　炭化物を極少量含む。
22．にぶい黄色（2.5Y6/3）シルトブロックに暗灰黄色（2.5Y5/2）細粒砂を少量含む。（整地層）
23．黄褐色（2.5Y5/3）中～細粒砂　礫を多く含む。
24．にぶい黄褐色（10YR4/3）中粒砂と暗灰黄色（10YR6/2）細粒砂～シルトの混合土（整地層）
25．オリーブ褐色（2.5Y4/3）極細粒砂　中～細粒砂を含む。
26．にぶい黄褐色（10YR4/3）極細～細粒砂　土器細片を極少量含む。
27．灰黄色（2.5Y6.5/2）均質な極細粒砂（整地層）
28．にぶい黄褐色（10YR4～5/3）均質なシルト～極細粒砂
29．黒褐色（10YR3/3）細～極細粒砂
30．暗褐色（10YR3/3）中粒砂　礫・三和土ブロックを多く含む。
31．褐色（10YR4/4）シルト～極細粒砂（第1遺構面基盤層）
32．灰黄褐色（10YR4/2）細～中粒砂　極細粒砂を含む。（整地層）
33．にぶい黄褐色（10YR5/3）細～中粒砂　層中下部に同色簡層を含む。（整地層）
34．にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト・灰黄色（10YR6/1）シルトの各ブロックに暗灰黄色（2.5Y5/2）中～細粒砂を少量含む。
35．灰褐色（7.5YR4/2）極細～細粒砂　上器細片を少量含む。
36．褐灰色（7.5YR4/1）極細～細粒砂　炭化物を極少量含む。
37．暗褐色（10YR3/3）中粒砂　三和土ブロックを多く含む。炭化物を少量含む。
38．褐色（7.5YR4/3）細～極細粒砂
39．にぶい黄褐色（10YR4/3）細～中粒砂
40．灰黄色（2.5Y6/2）細～極細粒砂
41．褐灰色（5YR6/1）シルト
42．黒褐色（10YR3/3）細～極細粒砂
43．褐灰色（5YR5/1）シルト　層中部に同色中粒砂ブロックを多く含む。
44．褐灰色（5YR5/1）均質なシルト　層下部に同色中粒砂の扁状ブロックを多く含む。
45．褐灰色（5YR6/1）均質な中粒砂　褐灰色（5YR5/1）シルトブロックを含む。
46．にぶい黄橙色（10YR6/3）シルトブロックに暗灰黄色（2.5Y5/2）中～細粒砂を含む。
47．褐灰色（5YR5/1）中粒砂に同色シルトブロックを多く含む。
48．暗赤褐色（5YR3/4）極細～中粒砂　炭化物を微少量含む。
49．褐灰色（5YR5/1）中粒砂に同色シルトブロックを多く含む。
50．褐灰色（5YR5/1）中粒砂に極細粒砂を含む。基盤層ブロックを少量含む。
51．褐灰色（5YR4/1）中粒砂　基盤層ブロックを極少量含む。
52．褐灰色（5YR5/1）極細粒砂　基盤層ブロックを少量含む。
53．暗赤褐色（5YR3/4）中粒砂に極細粒砂を含む。土器細片を極少量含む。
54．にぶい黄橙色（10YR4/3）極細粒砂に細～中粒砂を多く含む。
55．褐灰色（10YR5/1）極細粒砂
56．褐灰色（10YR5/1）細粒砂に中～粗粒砂を含む。
57．黄灰色（2.5Y6/1）細粒砂
58．黄灰色（2.5Y5/1）細粒砂
59．灰色（5Y5/1）中～細粒砂　シルトを少量含む。
60．黄灰色（2.5Y5/1）細粒砂　同色中粒砂の扁状ブロックを含む。
61．黄灰色（2.5Y5/1）細粒砂
62．灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂に細粒砂を含む。
63．黄灰色（2.5Y5～6/1）シルト（基盤層ブロック）に灰色（5Y4/1）細粒砂を含む。
64．灰黄褐色（10YR5/2）細粒砂に同色中粒砂ブロックを含む。
65．灰色（5Y5/1）細粒砂
66．黄灰色（2.5Y5/1）細粒砂　礫を含む。炭化物を極少量含む。
67．暗灰黄色（2.5Y4/2）極細粒砂に中～粗粒砂を多く含む。
68．暗灰黄色（2.5Y4/2）極細粒砂に中～粗粒砂を多く含む。
69．にぶい黄褐色（10YR5/3）細～中粒砂
70．灰黄褐色（10YR5/2）細粒砂に同色中～粗粒砂の扁状ブロックを含む。礫を少量含む。
71．灰色（2.5Y4/1）中～粗粒砂　炭化物を微少量含む。
72．にぶい黄褐色（10YR5/4）細粒砂に同色中～粗粒砂の扁状ブロックを含む。
73．にぶい黄褐色（10YR5/3）細粒砂
74．灰黄褐色（10YR5/2）極細粒砂に灰色中粒砂ブロックを含む。
75．灰黄褐色（10YR6/2）シルト
76．にぶい黄褐色（10YR5/3）細～中粒砂
77．灰色（5Y4/1）細粒砂　三和土ブロックを含む。
78．暗灰黄色（2.5Y5/2）細粒砂に中～粗粒砂を含む。
79．にぶい黄橙色（10YR7/4）細粒砂に中～粗粒砂を多く含む。
80．灰色（7.5Y4/1）極細粒砂に細～中粒砂を多く含む。
81．褐灰色（10YR4/1）中～細粒砂
82．暗灰黄色（2.5Y4/2）細粒砂　炭化物を微少量含む。
83．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂に中粒砂を含む。
84．にぶい黄褐色（10YR5/3）細～極細粒砂　三和土ブロックを含む。
85．にぶい黄褐色（10YR5/3）細～中粒砂
86．にぶい黄橙色（10YR6/3）細～中粒砂
87．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂に同色中粒砂ブロックを多く含む。
88．にぶい黄褐色（10YR5/3）極細粒砂に同色中粒砂の扁状ブロックを含む。
89．にぶい黄褐色（10YR5/3）細～極細粒砂　三和土ブロックを含む。
90．暗褐色（10YR3/4）中粒砂に粗粒砂を多く含む。
91．黄褐色（2.5Y4/3）シルト～極細粒砂

第17図　調査区南壁面断面図（土層一覧）



第 17 図　第１遺構面平面・南壁面断面図（1/100）



第 18 図　第２遺構面平面図（1/100）

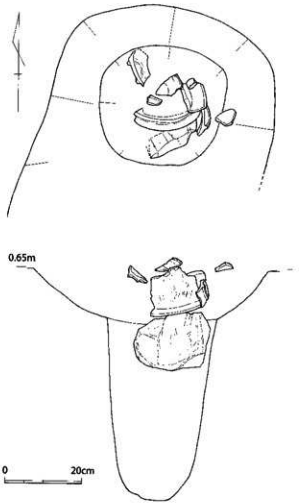
残存高 2.0cm をはかる。器壁が 1mm 前後と非常に薄く、口縁端部は比較的明瞭につまみ上げられている。

２は、SP3 から出土した黒色土器 A 類碗である。口縁部から体部にかけてヘラミガキを施すが、ミガキ間には隙間がやや多くみられる。

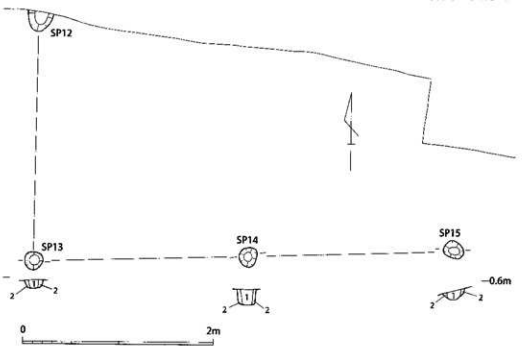
３～７は、SP2 から出土したものである。

３は、越州窯青磁 I 類碗である。高台径 7.0cm、残存高 4.0cm をはかる。体部外面の下半以下は回転ケズリを施し、高台もケズリ出しによる。畳付と見込みの一部以外に、黄褐色の釉がかかる。畳付に残る日跡は、直線的で細長い。体部中位から上方に向かって、ヘラ状の工具で切り込みが加えられており、輪花状に整形されたものと言える。

４は、「て」の字状口縁を有する土師器小皿である。口径 12.2cm に復元され、器高 9mm をはかる。ただし、全体的に歪んでいるため、法量の復元には正確さに欠ける。口縁端部はつまみ上げられるが、明瞭ではない。また、器壁も比較的厚く、１・５に比べて新しい様相を呈する。５は、「て」の字状口縁を有する土師器小皿である。口径 8.8cm



第 19 図　建物１-SP2 遺物出土状況（1/10）



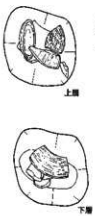
SP13　1. 黄灰色（2.5Y6/1）シルト～細粒砂
　　2. 黄灰色（2.5Y5/1）シルト～粘土質砂 基盤層ブロックを含む。
SP14　1. 褐灰色（10YR5/1）シルト～中粒砂 基盤層ブロックを微少量含む。
　　2. 褐灰色（10YR5/1）シルト～中粒砂 基盤層ブロックを含む。
SP15　1. 灰色（5Y4/1）極細粒砂 炭粒を多く含む。
　　2. オリーブ黒色（5Y3/1）シルト 基盤層ブロックを多く含む。

第 20 図　建物２平面・断面図（1/40）

に復元され、器高1cm前後をはかる。器壁は1mm前後と薄い。口縁端部はつまみ上げられているが、明瞭ではない。6は、土師器羽釜である。口縁端部は、鍔から短く垂直に立ち上がる。口縁部から鍔の下部にかけては横ナデを、体部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケを施す。7は、土師器甕である。口径29cmに復元され、残存高は6.6cm以上をはかる。これらの遺物をみると、1のように10世紀末前後の遺物もあるが、4のように11世紀初頭に下るものもあることから、この時期を下限とする。

なお、SP1・2の遺物は、柱を抜き取ったあとに廃棄された状態で出土している。このことから、建物の廃絶時期は11世紀初頭と判断する。また、これら柱穴をみると、柱痕部分に旋土ブロックや炭化物が多く含まれていた。ただし、これが火災と関連するものなのかは、判然としない。

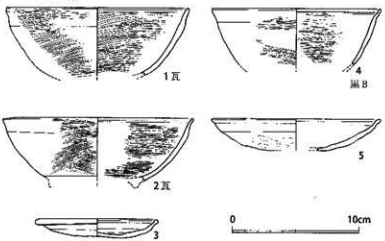
建物2　調査区北部で検出した東西2間（4.4m）、南北1間（2.6m）以上の掘立柱建物である。建物の主軸方向は、N-2°-Wである。建物の大部分は、調査区北方にあるものと考えられるため、その規模は明確ではない。柱穴の深さは検出面から5～15cmと先の建物1より浅いことから、包含層上面から掘削されたものと考えられる。よって、建物2は建物1よりも新しい時期の所産と考えられる。



第21図　SP16遺物出土状況（1/10）

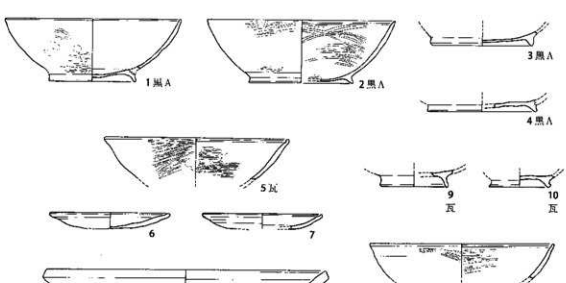
その他の柱穴　調査区で検出された柱穴は、先の建物1・2とほぼ同じ規模のもので占められており、主屋となるような建物に伴うものは認められなかった。また、これらの柱穴から出土した遺物は少ないものの、11世紀前半から12世紀にいたる各時期の遺物が出土している。このことから、各時期に小規模な建物が展開したと言えるが、屋敷地を形成するような状況ではない。なお、第21図に示す状況のとおり、SP16からは柱抜き取り後に第22図1～3の瓦器碗、土師器小皿などが廃棄された状態で出土した。

1・2は楠葉型瓦器碗である。1は口径14.4cmに復元され、残存高5.2cmをはかる。2は口径15.0cm、残存高5.0cmをはかる。いずれも内外面ともにヘラミガキを密に施す。I－2期の所産である。3は、「て」の字状口縁を有する土師器小皿である。口径9.8～10.1cm、器高1.5cmをはかる。口縁端部は肥厚させる程度となっている。SP16は、これらの遺物から11世紀後半と言える。



第22図　その他の柱穴出土遺物（1/3）

このほか、SP18からは第22図4の楠葉型黒色土器B類碗が出土している。口径13.4cmに復元され、残存高4.5cmをはかる。内外面ともにミガキが密に施されるが、体部外面下半のミガキ間には隙間が認められる。11世紀前半でも新しい時期、あるいは瓦器出現後の所産と考えても問題はないと言える。ま



1～3：溝３　4：溝４　5～8：溝５上面　9・10：溝６　11：溝７

第 23 図　溝３～７出土遺物（1～7・9～11：1/3　8：1/4）

た、SP20 からは第 22 図５の土師器大皿が出土した。５は、口径 13.4cm、器高 2.5cm をはかる。口縁端部は、強い横ナデによって外反する。時期は判然としないが、瓦器出現前後の所産と考えられる。

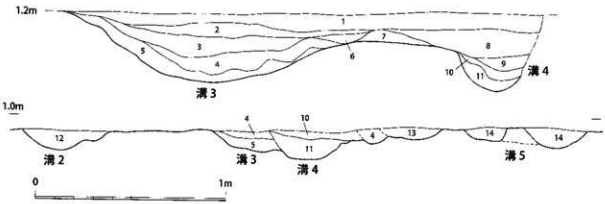
溝　3　調査区東部で検出した。検出面上では幅 1.2m 前後、深さ 10cm 前後をはかる。ほぼ真北に伸びる溝で、下層埋土には基盤層の再堆積土と考えられる灰色中粒砂を多く含むが、水が流れた形跡は認められない。基底面付近から黒色土器 A 類碗の大型片が出土した以外に、遺物はほとんど出土しなかった。

溝３からは、第 23 図１～３の黒色土器 A 類碗が出土した。このうち、第 18 図中に「土器２」と示した１は口径 14.0cm に復元され、器高 5.0cm をはかる。碗状の器形を呈する。内面の調整は不明であるが、外面には若干ヘラミガキが認められる。また第 18 図中に「土器１」と示した２は口径 14.8cm に復元され、器高 5.0cm をはかる。坏型の器形を呈する。内外面ともにヘラミガキを施すが、内面のミガキはやや粗雑である。口縁端部内面は、やや強めのナデによって沈線状に凹む。３は、高台径 8.2cm をはかる。内外面ともに風化しており、調整は不明である。

これらの遺物から、溝３は 11 世紀前半の所産と言え、建物 I 廃絶後に掘削されたと考えられる。また、溝３はその上面で検出された SP18 や土器溜まり２の出土遺物から、少なくとも 11 世紀中頃までには埋没したと言える。

溝　4　幅 0.8m、深さ 15cm 前後をはかる、南北に伸びる溝である。埋土の特徴は、溝３と極めて類似する。溝４からは第 23 図４の黒色土器 A 類碗が出土したものの、それ以外は土師器細片だけに限られる。４は、高台径 8.2cm に復元される。見込みには不定方向のミガキが施されるが、隙間が目立つ。11 世前半の所産と考えられる。

溝　5　幅 1.2m、深さ 25cm 前後をはかる、南北に伸びる溝である。調査区中部で溝６と重複するが、溝５が先行して掘削されている。埋土の特徴は、溝３と類似する。溝５からは第 23 図の５



第 24 図　溝 5～7 断面図（1/20）

～8 が出土した以外は、土師器細片が極少量出土しただけにとどまる。5 の楕葉型瓦器碗は、口径 14.6cm に復元され、残存高は 3.3cm をはかる。外面は口縁部まで分割ミガキが施されていることから、I 期の所産と言える。6 は、口径 9.4cm、器高 1.3cm をはかる。「て」の字状口縁皿の最末期的な形態を呈する。7 は、口径 9.4cm に復元され、器高 1.2cm をはかる。口縁端部はほとんど肥厚せず、「て」の字状口縁皿でも末期に近い形態と言える。8 は、口径 29.4cm に復元される。口縁部内外面に横ナデを施すが、頸部付近には押圧痕が残る。これらの遺物から、溝 5 は 11 世紀末の所産と言える。

溝 6　幅 0.4m、深さ 20cm 前後をはかる。調査区東側から南に屈曲するように掘削されている。埋土の特徴は、溝 3 と類似する。この溝の南側では、包含層から出土する遺物の量が急増し、遺構も多く分布するようになることから、建物群の周囲に巡らされたものと判断できる。溝 6 は、第 23 図の遺物が出土したことから、12 世紀前半に比定できる。

9・10 は、共に和泉型瓦器碗である。9 の高台径は 5.0cm に復元され、10 は高台径 4.9cm をはかる。いずれも II 期の所産であるが、詳細は明確にできない。

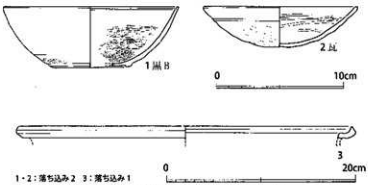
溝 7　幅 0.3m 前後の溝で、南に向かって深くなる。埋土の特徴は、溝 3～5 と類似する。瓦器・土師器等の細片を多く含むが、実測できたものは第 23 図 11 の楕葉型瓦器碗に限られる。11 は、口径 14.2cm に復元され、残存高 2.8cm をはかる。外面は、口縁部まで分割ヘラミガキが施されることから、I 期の所産と考えられる。

溝 8　幅 0.25m、深さ 10cm 前後をはかる。東西方向に掘削された溝である。埋土の特徴は溝 3～5 と類似するが、上層部は褐灰色細粒砂を多く含む。瓦器細片が出土している。

第 25 図　土坑 16 出土遺物（1/3）

土坑 14　調査区南端部で、その一部を検出しただけにとどまる。検出部分から南北 1.0m 以上、東西 1.8m 以上、深さ 20cm 以上の規模となる。瓦器・土師器細片が出土しており、12 世紀前半の所産となる。

土坑 16　1 辺 40cm 程度の隅丸方形の土坑である。埋土は極めて均質な極細粒砂からなる。柱痕等はなく、遺構の性格は不明である。土坑からは第 25 図 1 の土師器皿が出土している。口径は 14.2cm に復元され、残存高は 2.0cm をはかる。口縁部は強く外反する。２段ナデを施した可能性がある。その特徴から、11 世紀中頃の所産と考えられる。



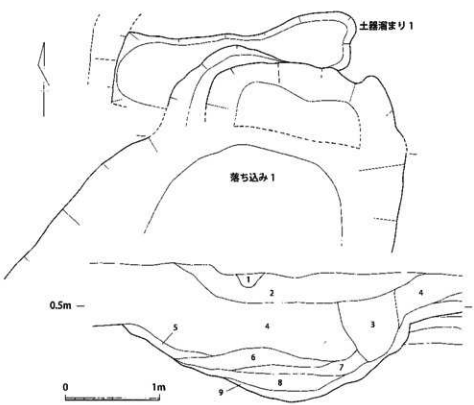
第 26 図　落ち込み 1・2 出土遺物
（1・2：1/3　3：1/4）

落ち込み 1　調査区南西部で検出した東西 5m 以上、南北 6m 以上をはかる土坑状の落ち込みである。掘削部分した範囲で最も深いところは検出面から 0.6m をはかるが、南側に向かって急激に落ち込むことから、相当深くなると予想される。落ち込み 1 の性格等は不明であるが、土器溜まり 1 の埋土を引きずり込むように削平していることやその規模から破堤帯の可能性が考えられる。なお、上層埋土は落ち込み 2 と共通することから、埋没時期も落ち込み 2 と同じ時期と考えられる。

落ち込み 1 からは、第 26 図 3 の土師器鍋が出土した。3 は口径 35.2cm に復元される。口縁端部は肥厚し、内反気味に屈曲する。13 世紀以降の所産と言える。

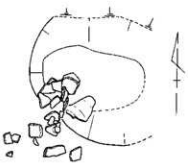
落ち込み 2　調査区西部は段状に約 20cm ほど落ち込む。これによって、調査区東部を覆った包含層～整地層はすべて削平されている。その埋土の特徴から、落ち込み 2 と同時期の所産である。

落ち込み 2 からは、第 26 図 1・2 が出土している。1 は、楕葉型の黒色土器 B 類碗である。口



1. 黄褐色（2.5Y3/4）シルトに粗～中粒砂を含む。
2. 黄褐色（2.5Y5/3）シルトに細～中粒砂を含む。
3. 黄褐色（2.5Y5/3）シルトに細粒砂を含む。層中心部は、オリーブ灰色（5GY5/1）に変色する。4・5 との層境は明瞭ではない。
4. にぶい黄色（2.5Y6/4）シルト
5. 黄褐色（2.5Y5/4）シルト・オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルト
6. 黄褐色（2.5Y5/4）シルト～細粒砂 土器細片を極少量含む。
7. 黄褐色（2.5Y5/4）シルト～細粒砂 オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルトブロックを含む。
8. 黄褐色（2.5Y5/4）シルト～細粒砂　オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルトブロックを多く含む。
9. オリーブ灰色（2.5GY5/1）シルトに赤褐色（5YR4/8）シルトブロックを多く含む。
10. オリーブ灰色（2.5GY5/1）当窓白シルト
11. 暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルトと細～中粒砂のラミナ 植物遺体を多く含む。層上部は、黄褐色（2.5Y5/4）に変色する。

第 27 図　落ち込み 1 平面・断面図（1/40）

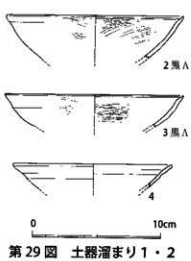


第 28 図　土器溜まり 2 遺物出土状況（1/10）

径 13.8cm に復元され、器高 4.7cm をはかる。外面の調整は明確ではないが、体部外面は高台付近まで密なミガキが確認でき、11 世紀前半の所産となる可能性が考えられる。落ち込み最下層で出土した流入品である。2 は和泉型瓦器碗で、口径 12.2cm、器高 3.2cm をはかる。見込みには圏線状の暗文が施される。高台は貼り付けられていないことから、Ⅳ－3 期の所産となる。落ち込み 2 の埋没時期を反映した遺物と考えられる。

土器溜まり 1　落ち込み 1 北端部で検出した炭化物層で、多くの遺物が出土した。しかし、これらは細かく割れていたため、実測できる遺物は極めて少ない。堆積土の特徴から、土器溜まり 2 と同時期の所産と考えられる。第 29 図 1 は、黒色土器 A 類碗である。高台径 6.9cm に復元され、碗型の器形が想定される。調整等は明確ではないが、11 世紀前半の所産となる可能性が考えられる。

土器溜まり 2　包含層上面に層厚 2 ～ 5cm 程度の炭化物を多く含む土層で、SP17 の周辺で検出した。この堆積土中から多くの遺物が出土したが、土器溜まり 1 と同じく細かく割れたものが多く、実測できる遺物は少ない。



第 29 図　土器溜まり 1・2 出土遺物（1/3）

第 29 図 2 の黒色土器 A 類碗は、碗状の器形を呈する。口径 13.8cm に復元され、残存高 4.5cm をはかる。内面には不規則な渦巻き状の暗文が粗雑に施される。やや外反する端部の内面には、凹線に近い沈線が施される。3 は、黒色土器 A 類碗である。口径 14.0cm に復元され、残存高 2.5cm をはかる。内外面ともに粗雑なミガキが施され、碗状の器形をなす。やや外反する端部の内面には、凹線に近い沈線が施される。4 は、土師器皿あるいは坏と考えられるが、残存部が少なく器種は確定しにくい。口径 12.4cm に復元され、残存高 2.4cm をはかる。これ以外に黒色土器 B 類碗や土師器小皿なども出土している。これらの遺物から、土器溜まり 2 は 11 世紀前半～中頃と考えられる。

（3）戦国～江戸時代の遺構と出土遺物

水路 1　調査区北端部で検出した、東西方向に伸びる水路である。検出面からの深さは 35cm、幅は 1.0m 以上をはかる。水路北岸は調査区外にあり、また第 1 層中の近世遺構面から掘削されていることから、正確な規模は把握できなかった。埋土は、自然堆積層を基本とし、下層には灰白色細粒砂層が堆積する。その上面に堆積した炭化物層からは、第 32 図にあげる遺物などが比較的まとまって出土した。

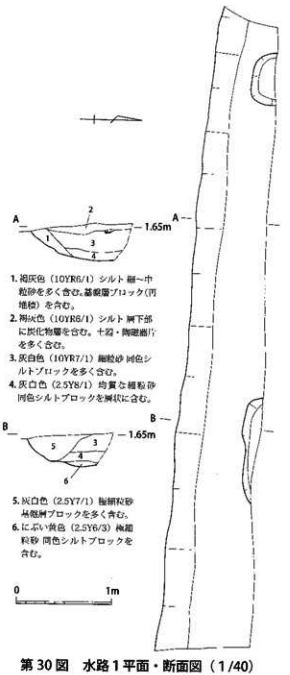
1 は瀬戸焼天口茶碗である。高台径 4.5cm、残存高 3.0cm をはかる。外面は体部中位まで鉄釉が掛けられ、過半部は露胎する。体部外面から高台にかけて、回転ヘラケズリによって成形される。2 は肥前系磁器である。口径 13.8cm に復元され、残存高 5.1cm をはかる。被熱し、胎土・釉

薬ともに変質していることから、器形も歪んでいる可能性がある。３は、肥前系陶器皿である。口径 12.4cm に復元され、残存高は 1.3cm をはかる。器壁が薄いことから Ⅱ 期以降の所産と考えられる。４は京都系土師器皿である。口径 16.4cm に復元され、残存高 3.0cm をはかる。内面および外面上半部には横ナデを施すが、外面下半部には成形時の押圧痕が残る。胎土・調整方法の特徴から、在地産とは考えにくい。５は無釉陶器鉢である。国外からの輸入品であることは明確であるが、産地は特定できない。口径 11.4cm に復元され、残存高 5.7cm をはかる。体部外面には自然釉が部分的に付着する。外面は粗雑な横ナデ、内面は丁寧な横ナデを施す。６は、丹波焼擂鉢である。口径 33.0cm に復元され、残存高 6.8cm をはかる。内面に横ナデを施したあと、ハケ状工具で擂り目を加える。外面上半部は横ナデが施されるものの、下半部には押圧痕が残る。７は褐釉陶器壺である。中国製と考えられる。底部径 9.0cm に復元され、残存高 7.8cm をはかる。内外面ともに明オリーブ色の釉薬が掛けられる。外面の調整は明確ではない。内面には縦方向のナデが施されるが、一部にタタキの当て具痕が残る。

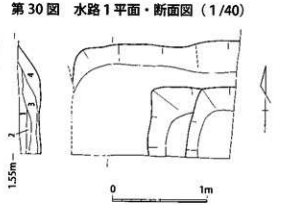
以上の遺物は、16 世紀後半から 17 世紀にいたる時期幅が認められるが、特に 16 世紀後半から 17 世紀初頭を中心とする。これ以外に、土坑７から出土した第 37 図６と同一個体と考えられる褐釉陶器壺の破片などが出土している。

ところで、調査区南側で検出した水路２は、当調査区の東端部で途絶するが、水路１は旧猪名川堤防直近まで掘削されている。また、この水路は敷地北側の細街路と併行するとおり、宅地境界に沿って掘削された可能性がある。このことから、水路２から派生する支線的な水路であったとも考えられる。

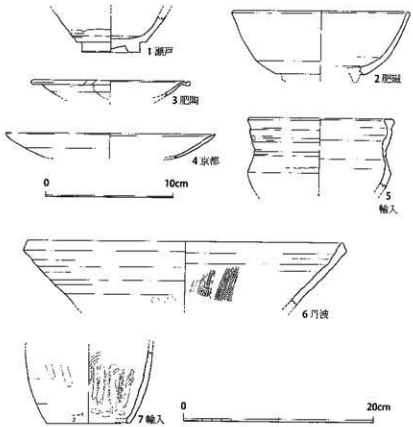
なお、水路１は江戸時代に作成された「庄本村絵図」と明治 20 年までに作成された「庄本村実地絵図」には描かれていない。出土遺物にも 18 世紀後半に下る



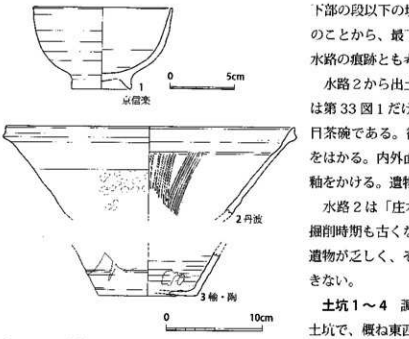
第 30 図　水路１平面・断面図（1/40）



第 31 図　水路２平面・断面図（1/40）



第 32 図　水路 1 出土遺物（1～5：1/3　6・7：1/4）



第 34 図　土坑 5 出土遺物（1：1/3　2・3：1/4）

第 33 図　水路 2
出土遺物（1/3）

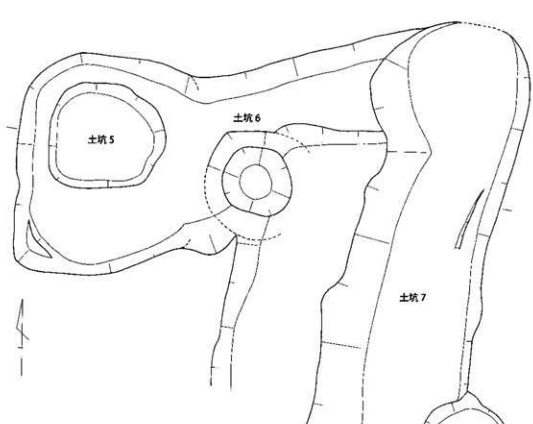
ものは含まれていないことから、水路 1 は 16 世紀後半に掘削され、18 世紀頃に埋め戻されたと考えられる。

水路 2　調査区南東端で検出した。幅 1.3m 以上、深さ 0.4m 以上をはかる溝である。西側にむかって階段状に浅くなり、調査区東壁面から 1.7m のところで途絶する。この水路は、近世遺構面から掘削されているが、堆積土の断面観察から、最下部の段以下の埋土は上層と大きく異なる。このことから、最下層部はそれ以前に掘削された水路の痕跡とも考えられる。

水路 2 から出土した遺物で、実測できたものは第 33 図 1 だけに限られる。1 は瀬戸焼の天目茶碗である。復元径 11.0cm、残存高 3.0cm をはかる。内外面ともにナデを施したあと、鉄釉をかける。遺物の時期は特定しにくい。

水路 2 は「庄本村絵図」にも記されており、掘削時期も古くなるものと考えられるが、出土遺物が乏しく、その時期については明確にはできない。

土坑 1～4　調査区北東部で検出した 4 基の土坑で、概ね東西方向に重複する。これら土坑も上面の近世遺構面から掘削されたもので、本来の深さは確定しにくいが、土坑 4 を参考にすると、50cm 前後となる。各土坑は本来円形状の平面形を呈したと考えられ、各土坑の直径は土坑 1 で 1.7m、土坑 2 で 1.2m、土坑 4 で 1.7m をはかる。これらの堆積土の状況を観察すると、一見して井戸のように見えたが、層下部に自然堆積層が認め



1. 灰色（5Y5/1）細粒砂 炭化物・焼土を微少量含む。
2. 灰色（5Y5/1）細粒砂 青色強細粒砂を縞状に含む。
3. 黄褐色（10YR5/6）細～極細粒砂 細粒砂～礫を含む。炭化物・三和土ブロックを多く含む。
4. 灰色（5Y6/1）細～中粒砂
5. 灰色（5Y6.5/1）比較的均質な細～極細粒砂 基盤層ブロックを少量含む。
6. 灰色（5Y5～6/1）細～極細粒砂 石・炭化物・三和土ブロックを含む。
7. 灰白色（5Y7/1）極細粒砂 基盤層ブロックを多く含む。
8. 灰黄色（2.5Y7/2）極細粒砂
9. 8に基盤層ブロックを多く含む。
10. 灰白色（2.5Y7/1）均質な極細粒砂 基盤層ブロックを多く含む。
11. 褐灰色（10YR5/1）中～細粒砂
12. 灰黄褐色（10YR5/2）比較的均質な細粒砂

第 35 図　土坑５～７平面・断面図（1/40）

られないことから、埋桶遺構と考えられる。これらの七坑からは、あまり遺物が出土していないものの、土坑４からは近世末期の遺物が出土している。また、これらは重複関係にあって、時期的に連続するものと考えられることから、総じて江戸時代後期から明治年間頃の所産と考えられる。

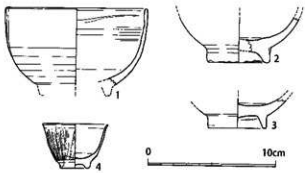
土坑５　土坑１～４と同質の遺構で、南北、東西とも 2.2m をはかる。不整方形状の掘り方の北寄りに、直径 1.2m 程度の円形状を呈する落ち込みが掘削される。この部分に桶が設置されたものと考えられるが、痕跡等は確認されなかった。桶内の堆積土からは第 34 図１が、その掘り方からは２・３が出土した。

１は京信楽焼陶器碗で、口径 10.8cm、器高 6.5cm をはかる。畳付以外に、透明釉を施釉する。内面はナデを、外面には回転ヘラケズリを施す。２は丹波焼擂鉢である。内面は横ナデのあとに櫛状工具で擂り目を施す。外面上半部は横ナデ、下半部には押圧痕が残る。口縁部内面には凹線状の段差が施され、端部は強いナデによって肥厚する。３は、褐釉陶器壷底部である。産地は特定でき

ないが、中国製の可能性が高い。底部径 10.2cm、残存高 4.7cm をはかる。外面は体部中位まで暗オリーブ色の釉薬が施釉されるが、下半部は露胎する。外面は回転ヘラケズリ、内面は同転ナデを施す。なお、3は土坑7からの混入品と考えられる。

これらの遺物から、七坑5は 17 世紀後半から 18 世紀前半の所産と考えられる。

土坑6　上坑 6 は直径 0.75m、深さ 0.3m 前後をはかる。埋上の状況から、その中に直径 30 cm 前後の桶を埋設したと想定できる。

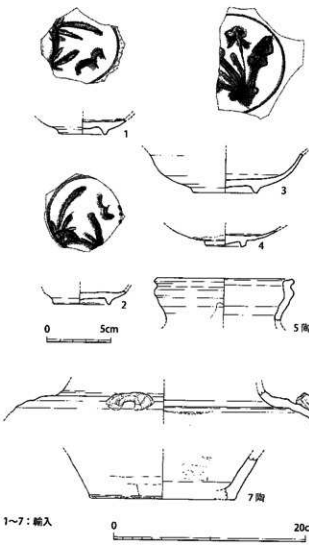


第 36 図　土坑6出土遺物（1/3）

第 36 図 1 は肥前系磁器碗で、外面に青磁釉、内面にやや青みがかった透明釉をかける。2 は肥前系青磁碗で、内外面ともに厚く青磁釉が掛けられている。畳付は露胎し、その内側には離れ砂が付着する。口径 11.0cm に復元され、残存高 6.2cm をはかる。体部内面に 2 条の凹線が施される。3は、肥前系磁器碗である。高台径 4.5cm、残存高 2.4cm 以上をはかる。畳付け以外に施釉する。4 は肥前系白磁杯で、器高 3.5cm、口径 5.2cm をはかる。体部外面は、ヘラ状工具で菊花状に彫込む。体部外面下半部から高台内にかけては露胎する。

これらの遺物から、土坑 6 は 17 世紀後半から 18 世紀前半の所産と言える。

土坑7　南北長 4.5m 以上、東西幅 1.4m 前後、深さ 25cm 前後をはかる溝状の土坑である。その埋土は基盤層と極めて酷似しているため、第 1 区（調査区南半部）では完全に見落とした遺構である。このため、正確な南北長は確定できない。また、埋土に際立った特徴は認められず、土坑の性格は明確ではない。



第 37 図　土坑7出土遺物
（1～5：1/3　6・7：1/4）

土坑 7 のうち、特に土層 12 から、第 37 図の遺物が出土している。1 は中国製染付鉢あるいは皿である。高台径 3.8cm、残存高 1.3cm をはかる。体部内面は花弁状に彫り出されており、菊皿状の形態を呈する。また、内面には草花風の意匠が描かれる。2 は中国製染付碗で、高台径 4.6cm、残存高 1.2cm をはかる。内外面に施釉するが、畳付は露胎し、その内側には離れ砂が付着

する。見込みには草花風の意匠が描かれる。１・２は、高台周囲を意図的に打ち欠いたものと考えられる。３は、中国製染付皿である。高台径 5.0cm、残存高 3.1cm をはかる。畳付以外に施釉し、見込みには草花風の意匠が描かれる。４は、中国製白磁皿である。内面から体部下半部にかけて施釉するが、畳付け周辺は露胎する。内面はナデ、外面は回転ヘラケズリを施す。５は、鉄釉陶器鉢である。明らかに輸入品であり、中国製の可能性が考えられる。口径 10.6cm に復元され、残存高 3.9cm をはかる。内外面ともに横ナデを施す。６は、褐釉陶器四耳壺である。明らかに輸入品であるが、産地は特定していない。ただし、耳の形状から中国製ではなく、タイなどの東南アジア製になる可能性が考えられる。頸部径 20.6cm に復元できるが、確実ではない。内外面ともに回転ナデを施すが、器面は起伏に窪む。７は褐釉陶器壺である。底部径 25.0cm に復元され、残存高 4.6cm をはかる。内面は板状工具によるナデが、外面の調整は判然としない。

これらの遺物から、十坑７は 16 世紀後半の所産と考える。

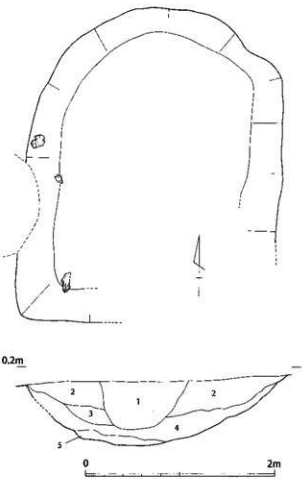
土坑９　調査区中部北側で検出した東西 4.5m 以上、南北 1.7m 以上をはかる大型の土坑である。上坑７と同じ堆積土で、規模・形状も類似することから、同質の遺構と考えられる。

土坑 10　調査区南西端部で検出した平面円形を呈する土坑である。検出部分から直径 2.5m 程度の規模になるものと考えられる。深さは 35cm 前後である。土坑埋土に際立った特徴はなく、また出土遺物も極めて少ないことから、遺構の性格は明確にできない。

土坑 11　土坑 10 の北東で検出した長軸長 2.1m、短軸長 0.9m、深さ 0.2m をはかる土坑である。土坑 14 と重複するが、平面隅丸長方形を呈するものと考えられる。16 世紀前後と考えられる土師器皿細片が出土している。

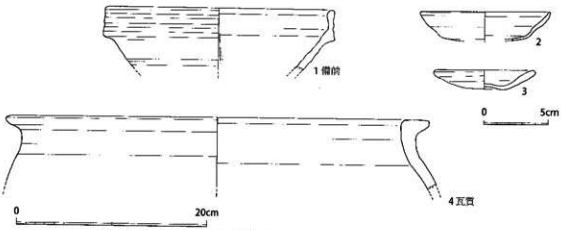
土坑 12　調査区南部で検出した埋桶遺構である。土坑は直径 1.3m、深さ 0.3m 前後をはかる。土坑基底面に厚さ２～３cm の板材の痕跡が検出されたことから、埋桶遺構と判断した。桶は、その痕跡から直径 1.05m 程度をはかる。

土坑 13　南北 3.3m、東西 2.8m 前後をはかる。第１遺構面からの深さは、約 2.1m と推定される。土坑北側は円形状で、南側は方形状を呈する。埋土上層には均質なシルトが、下層は基盤層（基本土層第４層）を母材とする灰色中粒砂が堆積し、植物遺体が多く含まれる。ところで、土坑 13 は第１面上で完全に見落とし、



1. 灰黄色（2.5Y6/2）シルト 細礫和砂を含む。
2. 青灰色（5BG6/1）シルト 細粒砂を含む。
3. 灰色（5BG6/1）シルト 同色細粒砂（基盤層）の塊状ブロックを含む。植物遺体を多く含む。
4. 緑灰色（5GG/1）シルトと同色細粒砂（基盤層）のラミナ。植物遺体を多く含む。
5. 青灰色（5PG6/1）シルト 同色細粒砂（基盤層）の塊状ブロックを含む。植物遺体を多く含む。

第 38 図　土坑 13 平面・断面図（１/40）

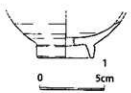


第39図　土坑13出土遺物（1・4：1/4　2・3：1/3）

第40図
井戸1
出土遺物
（1/3）

第2面で検出したものである。このため、平面形状や規模はこれを上回ることは間違いなく、また下層埋土の状況から土坑内に水が溜まっていたことが推定できることから、貯水目的に掘削された土坑と言える。

上坑13からは、第39図の遺物が出土した。1は備前焼擂鉢である。口径25.2cmに復元され、残存高6.5cmをはかる。口縁部は上方に突出し側面を形成し、そこに2条の凹線を施す。ハケ状工具により、擂り目が加えられる。17世紀の所産と言える。



第41図　その他の遺構
出土遺物
（1：1/3　2：1/4）

2は京都系土師器皿で、復元径10.2cm、器高2.3cmをはかる。内面の底部・体部の境界はやや強いナデを施す。模倣系となるのか、京都産かの判断はできない。3は在地産土師器小皿である。口径8.1cm、器高1.5cmをはかるが、器形は歪んでいる。底部内面は押圧によりやや隆起する。16世紀の所産である。4は瓦質土器甕である。口径44.2cmに復元され、残存高7.3cmをはかる。口縁部上面は平坦面を形成する。内外面ともに丁寧なナデを施す。これらの遺物は16世紀から17世紀の幅があり、土坑13は長期にわたって機能したものと考える。

井戸1　調査区南部で検出した直径1m前後、深さ0.7mをはかり、平面円形状を呈する土坑である。埋土は基盤層の再堆積土からなり、下層に自然堆積土は認められない。このため、井戸として機能したのかは判然としないが、平面形状から素掘りの井戸として扱った。井戸1からは、第40図1の肥前系白磁坏が出土した。高台径2.4cm、口径5.6cm、器高3.8cmをはかる。体部外面にはヘラ状工具により菊花状の彫込みを施すが、その間隔はやや広い。内外面とも施釉されるが、畳付けは露胎する。17世紀中頃の所産と言える。

井戸2　近現代の井戸によって大半が損なわれているが、本来は直径0.6m前後をはかる平面円形状の井戸と考えられる。上層は基盤層の2次堆積土、下層は灰色中粒砂とシルトのラミナからなる。土層断面に井戸枠などの痕跡は認められず、素掘りのものと推定される。

その他の遺構から出土した遺物　第41図1の肥前系磁器碗は、土坑14から出土したものである。高台径4.4cm、残存高3.1cmをはかる。体部外面の下半部は、露胎する。18世紀の所産と考えられる。

２の陶器壺口縁部は、浅い落ち込み状の溝２から出土したものである。口径15cm前後に復元したが、残存部が少ないので確実ではない。胎土からベトナム陶器の可能性が考えられる。口縁部外面は横ナデにより、凹線を施す。また一部に自然釉が付着する。口縁端部内面は不明瞭ながら受け部を形成している。

３．まとめ

庄本遺跡は、平成14年（2002年）に不時発見された遺跡である。発見に伴って緊急に行われた第１次調査では、承久の乱の契機となった椋橋荘の中心である庄本が、瀬戸内水運とも密接にかかわる中世の港町であったことを明らかにするなど、大きな成果が得られた。その成果の重要性は報道でも大きく取り上げられ、雨天の中で行われた現地説明会では、500人を超える市民が参加したように、多いに関心が寄せられた。

その後、この発掘調査の成果をもとに、神崎川河口一帯すなわち「河尻」における中世前期の流通にかかる研究は著しく進展することとなった。その結果、河尻を東極とする瀬戸内水運の実態や、港湾集落や市庭といった流通拠点を中心とする荘園内の流通構造などが明らかになる一方、これまで文献史学が提唱した平安京を中心とする流通構造については疑問視されはじめている。

このように、庄本遺跡の発見によってもたらされた成果が、中世の流通史に与えた影響は大きく、それゆえ考古学に限らず文献史学、人文地理学からも注目される遺跡となっている。しかし第１次調査では、11世紀後半に遡る遺物などが散見されたことから、集落の成立時期が椋橋荘が史料に初見する11世紀に遡る可能性を指摘したものの、それを裏付けるには至っていない。また、平成15年（2003年）に行った水道管埋設工事に伴う立会調査で集落が椋橋神社直近に広がることなどが判明したが、集落北部の様相はまだ明確に把握されているわけではなかった。

そのような状況のもと、２次となる今回の調査では、その庄本集落の範囲や成立時期に関わる成果が期待されたが、今回の成果はそうした期待を大きく超えるものとなった。以下、当調査にかかる成果について、その概略を述べることにする。

(1) 遺構の変遷

今回の調査は、古代後期から中世前期、中世後期から近世前半の遺構面を調査の対象とした。この間、14・15世紀の遺構面は確認できなかったことから、二つの遺構面における遺構の変遷について述べる。

古代後期～中世前期　今回の調査区で最も古い遺構は、11世紀初頭に廃絶する建物１である。よって、庄本遺跡において開発がはじまったのは、それ以前に遡ることになった。ただし、この時期の遺構・遺物は、建物１の周辺以外には極めて少なく、明確な集落がこの時期に形成された可能性は乏しい。次に古いのは、11世紀前半の溝３、土器溜まり１・２である。特に溝３が掘削された後は、溝４～７が順次掘削される。そのうち溝５は11世紀末に埋没し、溝６は12世紀前半、溝７は11世紀後半となるように、この時期から継続的に遺構が掘削されるようになる。しかし、12世紀中頃以降の遺構は確認できず、集落域は調査区東方へ移動あるいは縮小したと考えられる。その後は、落込み１・２が14世紀前半に形成・埋没しただけで、当調査区は耕地として利用されたものと考えられる。

中世後期～近世　先に述べたように、当調査区では14～15世紀の遺構は確認されておらず、この時期は耕地として利用されたものと考えられる。このあと、遺構が展開するようになるのは16世紀後半からである。この時期の遺構は土坑7を境に西側に集中する。また、調査区南西部では柱穴も多く検出されていることから、その周辺に新たな屋敷が形成されたと言える。

近世前期からは、遺構は調査区全面に掘削されるようになることから、以後敷地全体が宅地化したものと考えられる。ただし、18世紀以降の遺構については、調査の対象としなかったことから、その変遷については明確ではない。

一方、水路1・2のうち、水路1は16世紀後半までに、水路2は中世後期に開削されていた可能性が考えられる。このうち、水路1は18世紀頃に、水路2は19世紀後半以降に埋め立てられる。

（2）中世前期の庄本遺跡

集落の範囲　今回の調査で注目されるのは、調査区東部で検出された第2遺構面溝3～7である。これらは、11世紀前半から12世紀前半にかけて、断続的に掘削されたものである。特に溝3・5は溝幅が1mを超え、この時期の区画溝としては大規模なものとなる。このような区画溝の西側からは建物2棟と若干の柱穴が検出されたものの、西に向かって次第に遺構は希薄になり、西半部ではほとんどなくなる。一方、調査区東端部の遺構密度は高く、また溝6東側の包含層からは遺物が多く出土するなど、遺構・遺物の両面から溝3～7の東西で調査区の様相は大きく異なる。このことから、この溝群が集落西端を区切る区画溝として機能したと言える。

なお、このような区画溝で集落外周の境界を明示する事例は、他に北新町遺跡（大阪府大東市所在）などがあり、この時期の流通拠点に共通する特徴と言える。

集落の成立時期　先に11世紀初頭に建物1が廃絶することから、遺跡の成立はそれ以前に遡ると指摘した。しかし、11世紀初頭までの遺構は建物1周辺以外にほとんど認められないことから、古代後期の庄本遺跡には散村が展開したと言える。そして、流通拠点として本格的な集落が形成しはじめるのは、溝3が掘削される11世紀前半からである。この時期から調査区東側を中心に、集落関連遺構が継続的に掘削されるようになる。また、東西方向の区画溝である溝8なども掘削されているように、溝3～7を西端とする集村としての庄本集落が形成したものと推定できる。

このことから、椋橋荘が史料に初見する永承3年（1048年）までに、庄本遺跡の集落（流通拠点）が本格的に形成することが、ほぼ確定した。また、地形的特徴から椋橋神社を頂点とする砂堆において集落が成立し、その後第1次調査区が位置する南半部に向かって領域を拡大するという形成過程が、今回の調査によってほぼ確実視できるようになった。

出土遺物の諸特徴　出土遺物の中で特筆されるのが、越州窯系青磁Ⅰ類碗である。豊中市内出土の越州窯系青磁はこれで2例目となるが、いずれも庄本遺跡から出土したものである。越州窯系青磁をはじめとする初期貿易陶磁は、官衙あるいはその関連が考えられる遺跡、また寺院などから出土する傾向にあり、一般の集落から出土することは極めて少ない。そうした遺物が、一つの遺跡から2例も出土するというのは、集落成員の特殊性をふまえる必要があるだろう。第1次調査区の石錘再加工工房から出土した多彩な貿易陶磁などは、そのまま商職人の経済力を示すものとして評価される。しかし、越州窯系青磁Ⅰ類碗が出土した建物1をみると、使われている柱の直径は10～

15cmと、この時期の建物としては極めて貧弱である。これ以外に主屋があったと考えるにしても、出土したこの時期の施釉陶器は他に灰釉陶器碗片２点にすぎない。国産施釉陶器の生産が衰退する時期とは言え、その出土量はこの時期の垂水西牧城の建物群と比べても極めて少ない。

このように、越州窯系青磁Ⅰ類碗とその他の遺物の様相、あるいは建物１の諸特徴との間に見出されるギャップは大きい。しかし、このギャップがどのような要因によるものなのか、現段階では説明できないので、今後の課題としたい。

次いで、出土した供膳具について、11世紀前半のものは楠葉型瓦器碗に先行する黒色土器Ｂ類碗以外は、すべて在地産の土器供膳具であった。第１次調査区では、西日本一帯からもたらされた搬入供膳具が多数出土したが、このことと対照的なあり方を示す。もちろん、当調査区は集落の外縁部に位置し、遺物の出土量も少ない。このため、絶対数が極めて少ない搬入供膳具が出土しなくとも、特に問題とはならない。

ただし、瀬戸内水運をはじめとする広域流通網に連接する在地流通網がどの時期に成立するのか、搬入供膳具はその手がかりとなることから、今後とも11世紀前半の遺物における搬入供膳具の存否には注意する必要がある。

（３）中世末期～近世初期の庄本遺跡

屋敷地について　調査区の状況をみると、近世以降の遺構については調査区全体に分布することが、調査区壁面の観察から確認できる。これに対して、中世後期に遡る遺構は、土坑７の西側に集中する。検出した柱穴も調査区南西端部に集中する状況にあり、建物はその西側に展開すると考えられる。しかしながら、当調査区で検出した柱穴から建物は復元できず、屋敷地の変遷を具体化するまでにはいたらなかった。一方、そのほかの遺構をみると、土坑７・９・10のように大規模な土坑が多い。このうち、土坑13は貯水目的と考えられるが、それ以外の土坑の性格は不明である。

ところで、これらの遺構も土坑７から西に多く分布するが、土坑13と井戸１は土坑７の南側に掘削されており、この部分が屋敷内外を区切る土地利用上の境界になるものと想定される。よって、当調査区で検出した16世紀後半の屋敷地の中心となる主屋などは、調査区南西端からその西側に広がるものと考えられる。

なお、一旦耕地化した集落西端部に新たな屋敷が成立したということは、中世末期に集落範囲が旧猪名川直近まで拡大したことを意味する。それは、この時期までに旧猪名川の築堤が完了し、堤防の裏側が宅地として活用できるほど、安定した状態にあったことを反映するのではなかろうか。

水路　今回の調査では調査区北端と南端から、２条の水路が検出された。調査区南西端で検出された水路２は、「庄本村絵図」や「庄本村実測絵図」に記された水路に比定される。一方、18世紀頃に埋め立てられた水路１は、これらの絵図に記されていない。ところで、これらの水路は現在の敷地と細街路の境界上、あるいはその延長に掘削されている。また「庄本村絵図」をみると、集落内外に多数の水路が描かれている。これらのことから、現在の細街路のいくつかはかつての水路跡である可能性も生じる。こうした状況をふまえると、中世後期から近世前期の庄本村集落域には、水路が縦横に巡らされていたと考える余地は十分あるだろう。

なお、第１次調査で検出された舟入り江は、16世紀後半に大々的に再整備されている。今回の調

査では集落の拡大とともに集落内に水路が掘削されていたことが明らかになったが、これらはともに16世紀に行われていることで共通することから、この時期に庄本村の港湾機能が著しく拡充されたと言える。

出土遺物について　16世紀後半の遺物で特筆されるのは、土坑7と水路1の出土遺物である。これらの遺構から出土した遺物に占める貿易陶磁の量は非常に多い。特に土坑7出土遺物のうち、実測できた遺物がすべて貿易陶磁であったほか、ベトナム陶器やタイ産の可能性がある褐釉陶器なども出土しているとおり、その内容は国際的と言える。また第1次調査でも、中国産無釉陶器や朝鮮産白磁、ベトナム陶器などの遺物が出土しており、その存在は軽視できない。そうした遺物の特徴は堺環濠都市遺跡とも似ており、東アジアをめぐる貿易の末端がこの時期の庄本遺跡に及んだ可能性も視野に含める必要もあるだろう。

以上、第2次調査の成果について、特に今回の調査では集落の成立時期と集落北半部の状況が確認された点は大きな成果となった。また、16世紀後半における水路の開削は、この時期における港湾機能の拡充と連動したものと考えられるが、そうした時期に貿易陶磁が急増する点も留意する必要がある。16世紀は東南アジアの各地に日本人町が形成されるように環東アジア的な貿易が著しく活発になった時期とされる。中世後期に港湾集落としての機能が停滞した庄本集落が、16世紀に改めて復活することの要因については、今後の調査によって解明されることを期待したい。

第Ⅴ章　確認調査の成果

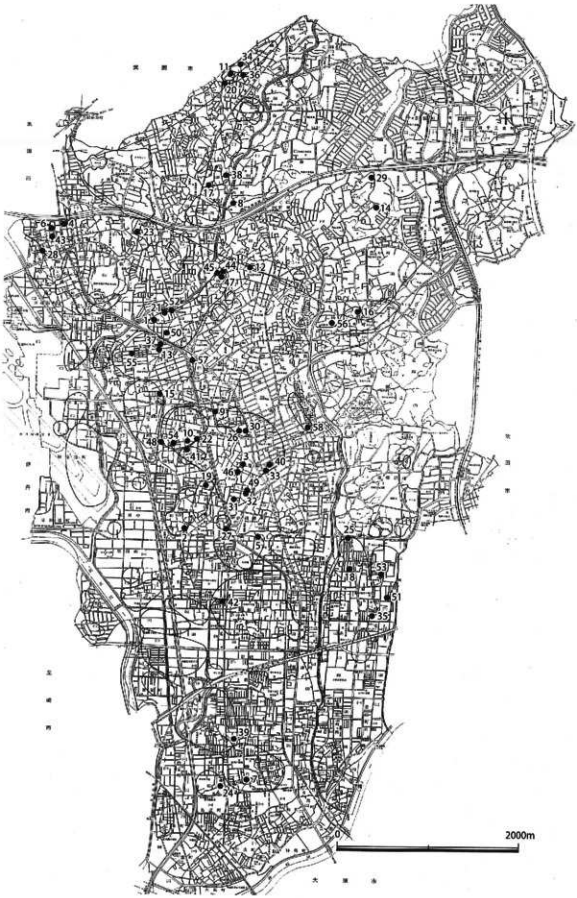
昨年度1月から3月および今年度4月から12月の間に個人住宅を対象に行なった確認調査は、58件を数え、昨年度13件、今年度45件という内訳である。このうち、10件の調査で遺構等が確認されたが、建物に伴う基礎掘削が遺構面に達しないことや建物基礎部分の設計変更などから、本格的な発掘調査を行うには至っていない。

以下、確認調査の概要について報告する。第42図に掲載した調査地点位置図の番号および各確認調査の番号は、下表の番号に対応する。

第1表　平成20年（2008年）確認調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査原因	面積（㎡）	遺構等の有無	調査後の処置	担当者	備考
1	本町遺跡	本町2丁目145　7	20080117	個人住宅建設	56.46	未確認	着工	陣内	調作土内
2	原田遺跡	原出元町3丁目21－1の一部	20080131	個人住宅建設	102.68	無	着工	陣内	
3	板塚古墳群	南板塚1丁目27－3	20080131	個人住宅建設	59.50	無	着工	陣内	
4	笠池北遺跡	笠池東町4丁目30	20080207	個人住宅建設	52.17	有	慎重工事	陣内	基礎深度浅
5	春岳北遺跡	曽根東町5丁目84－1	20080214	個人住宅建設	57.28	有	再立会後、慎重工事	陣内	改良方法変更
6	笠池北遺跡	笠池北町1丁目130－9	20080221	個人住宅建設	45.55	有	着工	植田	基礎深度浅
7	庄内遺跡	庄内栄町5丁目30－36	20080228	個人住宅建設	98.87	無	着工	陣内	
8	板井谷窯跡群	桜の町6丁目15－2	20080228	個人住宅建設	34.78	無	着工	植田	
9	板塚古墳群	中板塚2丁目173	20080306	個人住宅建設	26.79	無	着工	陣内	
10	岡町北遺跡・板塚古墳群	岡町北1丁目65－2	20080314	個人住宅建設	88.10	無	着工	陣内	
11	太鼓塚古墳群	永楽荘2丁目276	20080314	個人住宅建設	87.62	未確認	着工	陣内	盛土内
12	板井谷窯跡群	上野西2丁目130-19	20080314	個人住宅建設	56.16	無	着工	陣内	
13	新免遺跡	玉井町1丁目198－4	20080319	個人住宅建設	56.71	無	着工	陣内	
14	板井谷窯跡群	東豊中町3丁目58－13	20080403	個人住宅建設	157.43	無	着工	陣内	
15	山ノ上遺跡	立花町2丁目16	20080410	個人住宅建設	71.23	有	慎重工事	植田	基礎深度浅
16	熊野田遺跡	熊野町4丁目98－2の一部	20080508	個人住宅建設	50.22	有	慎重工事	植田	近世のみ
17	少路遺跡	桜の町5丁目12－6	20080508	個人住宅建設	74.52	有	慎重工事	植出	基礎深度浅
18	小曽根遺跡	北条町1丁目60－25	20080515	個人住宅建設	41.61	有	慎重工事	植田	遺構希薄
19	曽根遺跡	曽根西町3丁目24－1	20080515	個人住宅建設	62.46	有	再立会後、慎重工事	植田	盛土施工
20	太鼓塚古墳群	永楽荘2丁目202	20080521	個人住宅建設	70.25	未確認	着工	植田	盛土内
21	本町遺跡	本町3丁目160－5	20080529	個人住宅建設	54.76	未確認	着工	植出	盛土内
22	岡町北遺跡・板塚古墳群	岡町北1丁目11,11－1	20080529	個人住宅建設	138.18	無	着工	植出	
23	北刀根山遺跡	刀根山元町233　3	20080529	個人住宅建設	45.75	無	着工	植出	
24	島江遺跡	庄内栄町5丁目61－4	20080626	個人住宅建設	30.87	無	着工	陣内	
25	小曽根遺跡	北条町2丁目5－35	20080703	個人住宅建設	47.70	無	着工	陣内	
26	岡町遺跡・板塚古墳群	中板塚2丁目353の一部	20080710	個人住宅建設	54.91	無	着工	陣内	
27	曽根東遺跡	曽根岡町1丁目147の一部	20080710	個人住宅建設	107.54	無	着工	陣内	
28	笠池北遺跡	笠池北町2丁目16　8	20080717	個人住宅建設	63.12	無	着工	陣内	
29	板井谷窯跡群	東豊中町2丁目133－1	20080724	個人住宅建設	233.77	未確認	着工	陣内	盛土内

30	岡町遺跡・ 桜塚古墳群	中桜塚2丁目363－1	20080724	個人住宅建設	33.12	無	着工	陣内	
31	桜塚古墳群	曽根東町1丁目50－5	20080724	個人住宅建設	77.98	無	着工	陣内	
32	桜塚古墳群	南桜塚1丁目234－6,7	20080731	個人住宅建設	85.85	無	着工	植田	
33	桜塚古墳群	南桜塚2丁目82－2	20080731	個人住宅建設	62.25	無	着工	植田	
34	太鼓塚古墳群	永楽荘3丁目84－12	20080731	個人住宅建設	83.62	無	着工	植田	
35	北条遺跡	小曽根1丁目1666－3	20080807	個人住宅建設	106.00	無	着工	陣内	
36	太鼓塚古墳群	永楽荘3丁目32－6	20080807	個人住宅建設	63.34	無	着工	陣内	
37	新免遺跡	玉井町1丁目232－5、233－6	20080828	店舗兼個人住宅建設	15.90	無	着工	植田	
38	少路遺跡	桜の町5丁目72－22	20080828	分譲住宅建設	40.10	未確認	着工	植田	盛上内
39	昌田遺跡	庄内幸町3丁目84－6	20080828	個人住宅建設	40.23	無	着工	植田	
40	桜塚古墳群	南桜塚2丁目57－2	20080904	個人住宅建設	56.05	無	着工	陣内	
41	岡町南遺跡	岡町南2丁目6	20080911	個人住宅建設	79.28	無	着工	陣内	
42	穂積遺跡	服部西町4丁目305－2	20080918	個人住宅建設	62.50	無	着工	植田	
43	蛍池北遺跡	蛍池北町1丁目75－2	20080925	個人住宅建設	85.20	無	着工	陣内	
44	本町遺跡	本町9丁目169－3	20080925	個人住宅建設	61.36	無	着工	陣内	
45	本町遺跡	本町9丁目168　2の一部	20080925	個人住宅建設	55.89	無	着工	陣内	
46	桜塚古墳群	南桜塚1丁目60－14	20081009	個人住宅建設	72.28	無	着工	陣内	
47	本町遺跡	本町9丁目168－3	20081016	個人住宅建設	55.08	無	着工	陣内	
48	岡町北遺跡	岡町北2丁目140－3	20081016	個人住宅建設	59.62	無	着工	陣内	
49	桜塚古墳群	南桜塚1丁目234の一部	20081023	個人住宅建設	61.27	無	着工	植田	
50	本町遺跡	本町2丁目2－6の一部	20081023	個人住宅建設	83.63	有	再立会後、 個里工弁	植田	基礎深度浅
51	北条遺跡	小曽根2丁目1822－2	20081030	個人住宅建設	42.00	無	着工	植田	
52	本町遺跡	本町3丁目160　7	20081113	個人住宅建設	52.79	無	着工	植田	
53	北条遺跡	北条町3丁目136－6,19	20081120	個人住宅建設	74.21	無	着工	植田	
54	岡町北遺跡・ 桜塚古墳群	岡町北2丁目148、148－1	20081120	個人住宅建設	118.42	無	着工	植田	
55	新免遺跡	玉井町3丁目14－10	20081120	個人住宅建設	63.08	有	再立会後、 慣卓工事	植田	盛土施工
56	桜井谷窯跡群	熊野町4丁目247－3,5、249－2	20081211	個人住宅建設	65.04	無	着工	陣内	
57	新免遺跡	岡上の町3丁目50	20081218	個人住宅建設	30.23	無	着工	陣内	
58	下原窯跡群	南桜塚4丁目93-1	20081225	個人住宅建設	43.47	無	着工	植田	

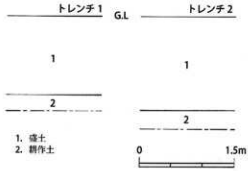


第 42 図　確認調査地点位置図

2008－01　本町遺跡

調査日：平成20年（2008年）1月17日
調査場所：豊中市本町2丁目145－7
調査対象面積：56.46㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下180㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第43図　トレンチ掘削状況

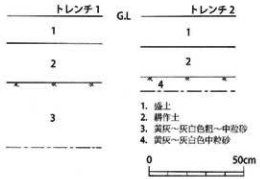


第44図　トレンチ断面図

2008－02　原田遺跡

調査日：平成20年（2008年）1月31日
調査場所：豊中市原田元町3丁目
21－1の一部
調査対象面積：102.68㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下32～35㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第45図　トレンチ掘削状況

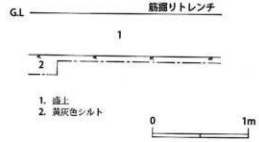


第46図　トレンチ断面図

2008－03　桜塚古墳群

調査日：平成 20 年（2008 年）1 月 31 日
調査場所：豊中市南桜塚 1 丁目 27 － 3
調査対象面積：59.5 ㎡
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下 45 ㎝において基盤層を検出したが、古墳に関連する遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第 47 図　トレンチ掘削状況

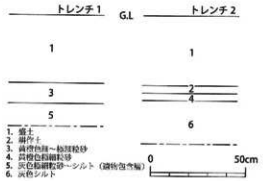


第 48 図　トレンチ断面図

2008－04　蛍池北遺跡

調査日：平成 20 年（2008 年）2 月 7 日
調査場所：豊中市蛍池東町 4 丁目 30
調査対象面積：52.17 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下 45 ～ 48 ㎝において須恵器砕片を含む遺物包含層を検出したが、遺構は確認されなかった。
調査後の処置：建物に伴う基礎掘削は盛土内に収まるため、慎重工事を指示。

第 49 図　トレンチ掘削状況

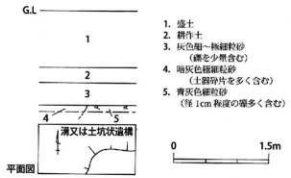


第 50 図　トレンチ断面図

2008－05　豊島北遺跡

調査日：平成20年（2008年）2月14日
調査場所：豊中市曽根東町5丁目84－1
調査対象面積：57.28㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下150㎝において基盤層を検出し、その上面で遺構が確認された。
調査後の処置：地盤改良方法の変更により、遺構の損壊は免れることから、再立会後、慎重工事を指示。

第51図　トレンチ掘削状況

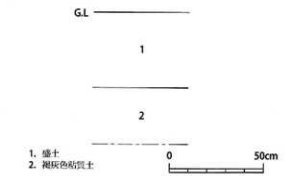


第52図　トレンチ平面・断面図

2008－06　蛍池北遺跡

調査日：平成20年（2008年）2月21日
調査場所：豊中市蛍池北町1丁目130－9
調査対象面積：45.55㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下40～70㎝において遺物包含層（遺構を伴う可能性あり）を検出した。
調査後の処置：建物に伴う基礎掘削は盛土内に収まるため、慎重工事を指示。

第53図　トレンチ掘削状況



第54図　トレンチ断面図

2008－07　庄内遺跡

調査日：平成20年（2008年）2月28日
調査場所：豊中市庄内幸町5丁目30－36
調査対象面積：98.87㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下165㎝）内において、遺構・遺物等　は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第55図　トレンチ掘削状況

第56図　トレンチ断面図

2008－08　桜井谷窯跡群

調査日：平成20年（2008年）2月28日
調査場所：豊中市桜の町6丁目15－2
調査対象面積：34.78㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下100㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

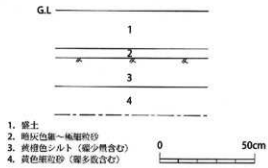
第57図　トレンチ掘削状況

第58図　トレンチ断面図

2008－09　桜塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）3月6日
調査場所：豊中市中桜塚2丁目173
調査対象面積：26.79㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下25㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第59図　トレンチ掘削状況

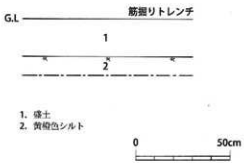


第60図　トレンチ断面図

2008－10　岡町北遺跡・桜塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）3月14日
調査場所：豊中市岡町北1丁目65－2
調査対象面積：88.1㎡
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下20㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第61図　トレンチ掘削状況

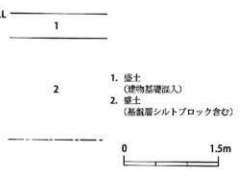


第62図　トレンチ断面図

2008－11　太鼓塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）3月14日
調査場所：豊中市永楽荘2丁目276
調査対象面積：87.62㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下200㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第63図　トレンチ掘削状況

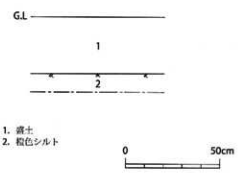


第64図　トレンチ断面図

2008－12　桜井谷窯跡群

調査日：平成20年（2008年）3月14日
調査場所：豊中市上野西2丁目130－19
調査対象面積：56.16㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下30㎝において基盤層を検出したが、窯跡に関連する遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第65図　トレンチ掘削状況

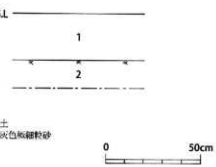


第66図　トレンチ断面図

2008－13　新免遺跡

調査日：平成20年（2008年）3月19日
調査場所：豊中市玉井町1丁目198－4
調査対象面積：56.71㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下25㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第67図　トレンチ掘削状況

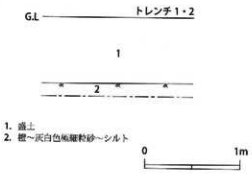


第68図　トレンチ断面図

2008－14　桜井谷窯跡群

調査日：平成20年（2008年）4月3日
調査場所：豊中市東豊中町3丁目58－1,3
調査対象面積：157.43㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下70～80㎝において基盤層を検出したが、窯跡に関連する遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第69図　トレンチ掘削状況

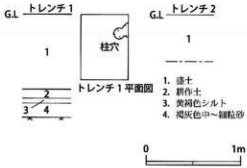


第70図　トレンチ断面図

2008－15　山ノ上遺跡

調査日：平成 20 年（2008 年）4 月 10 日
調査場所：豊中市立花町２丁目 16
調査対象面積：71.23 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：トレンチ１において、柱穴が検出された。
調査後の処置：建物に伴う基礎掘削が遺構までは達しないことから、慎重工事を指示。

第 71 図　トレンチ掘削状況

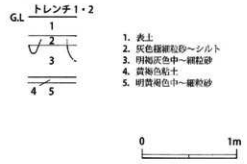


第 72 図　トレンチ平面・断面図

2008－16　熊野田遺跡

調査日：平成 20 年（2008 年）5 月 8 日
調査場所：豊中市熊野町４丁目 98－２の一部
調査対象面積：50.22 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ２か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：表土直下において近世末期～後期の遺構を検出したが、遺物は確認されなかった。
調査後の処置：遺構等が中世に遡る可能性は乏しいことから、慎重工事を指示。

第 73 図　トレンチ掘削状況

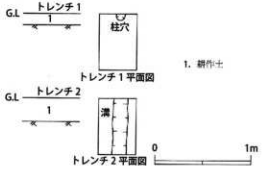


第 74 図　トレンチ断面図

2008－17　少路遺跡

調査日：平成 20 年（2008 年）5 月 8 日
調査場所：豊中市桜の町 5 丁目 12 － 6
調査対象面積：74.52 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：トレンチ 1 ・ 2 において、柱穴・溝が検出された。
調査後の処置：建物に伴う基礎掘削は遺構面まで達しないことから、慎重工事を指示。

第 75 図　トレンチ掘削状況

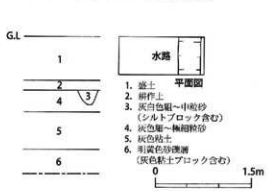


第 76 図　トレンチ平面・断面図

2008－18　小曽根遺跡

調査日：平成 20 年（2008 年）5 月 15 日
調査場所：豊中市北条町 1 丁目 60 － 25
調査対象面積：41.61 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：耕作土直下において水路 1 条を検出したが、それ以外に明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、慎重工事を指示。

第 77 図　トレンチ掘削状況

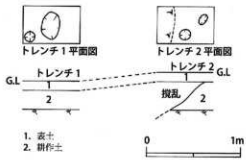


第 78 図　トレンチ平面・断面図

2008－19　曽根遺跡

調査日：平成20年（2008年）5月15日
調査場所：豊中市曽根西町3丁目24－1
調査対象面積：62.46㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：トレンチ1では地表下30㎝で、トレンチ2では地表下40㎝で遺構面を検出し、柱穴等を確認した。
調査後の処置：盛土施工により遺構の損壊は免れることから、再立会後、慎重工事を指示。

第79図　トレンチ掘削状況



第80図　トレンチ平面・断面図

2008－20　太鼓塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）5月21日
調査場所：豊中市永楽荘2丁目202
調査対象面積：70.25㎡
調査の方法：重機によりトレンチ3か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下30㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

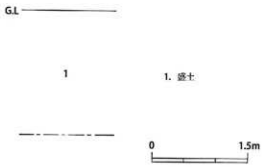
第81図　トレンチ掘削状況

第82図　トレンチ断面図

2008－21　本町遺跡

調査日：平成20年（2008年）5月29日
調査場所：豊中市本町3丁目160－5
調査対象面積：54.76㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下200㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第83図　トレンチ掘削状況

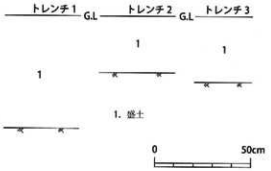


第84図　トレンチ断面図

2008－22　岡町北遺跡・桜塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）5月29日
調査場所：豊中市岡町北1丁目11、11－1
調査対象面積：138.18㎡
調査の方法：重機により坪掘りトレンチ1か所、筋掘りトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下30～60㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第85図　トレンチ掘削状況

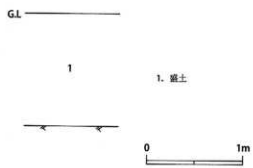


第86図　トレンチ断面図

2008－23　北刀根山遺跡

調査日：平成 20 年（2008 年）5 月 29 日
調査場所：豊中市刀根山元町 233 － 3
調査対象面積：45.75 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下 120 ㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第 87 図　トレンチ掘削状況

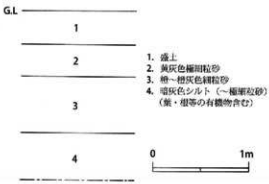


第 88 図　トレンチ断面図

2008－24　島江遺跡

調査日：平成 20 年（2008 年）6 月 26 日
調査場所：豊中市庄内栄町 5 丁目 61 － 4
調査対象面積：30.87 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下 180 ㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第 89 図　トレンチ掘削状況



第 90 図　トレンチ断面図

2008 - 25　小曽根遺跡

調査日：平成 20 年（2008 年）7 月 3 日
調査場所：豊中市北条町 2 丁目 5 － 35
調査対象面積：47.7 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下 170 ㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

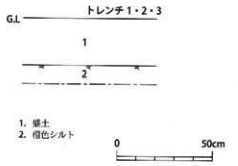
第 91 図　トレンチ掘削状況

第 92 図　トレンチ断面図

2008 - 26　岡町遺跡・桜塚古墳群

調査日：平成 20 年（2008 年）7 月 10 日
調査場所：豊中市中桜塚 2 丁目 353 の一部
調査対象面積：54.91 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 3 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下 25 ㎝において基盤層を検出したが、古墳・集落に関連する遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第 93 図　トレンチ掘削状況

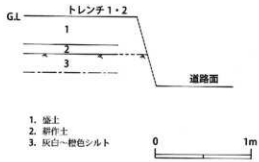


第 94 図　トレンチ断面図

2008－27　曽根東遺跡

調査日：平成20年（2008年）7月10日
調査場所：豊中市曽根西町1丁目147の一部
調査対象面積：107.54㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削しトレンチ内を精査、さらに1か所を断面観察した。
調査の概要：地表下40㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第95図　トレンチ掘削状況

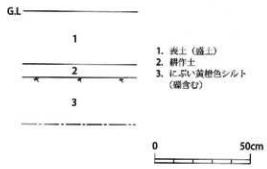


第96図　トレンチ断面図

2008－28　蛍池北遺跡

調査日：平成20年（2008年）7月17日
調査場所：豊中市蛍池北町2丁目16－8
調査対象面積：63.12㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下35㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第97図　トレンチ掘削状況

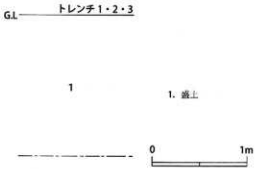


第98図　トレンチ断面図

2008－29　桜井谷窯跡群

調査日：平成20年（2008年）7月24日
調査場所：豊中市東豊中町2丁目133－1
調査対象面積：233.77㎡
調査の方法：重機によりトレンチ3か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下150㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第99図　トレンチ掘削状況

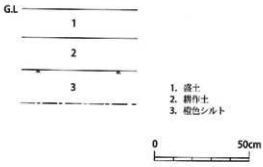


第100図　トレンチ断面図

2008－30　岡町遺跡・桜塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）7月24日
調査場所：豊中市中桜塚2丁目363－1
調査対象面積：33.12㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下32㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第101図　トレンチ掘削状況

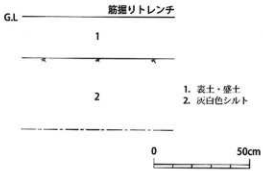


第102図　トレンチ断面図

2008－31　桜塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）7月24日
調査場所：豊中市曽根東町1丁目50－5
調査対象面積：77.98㎡
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下22～30㎝において基盤層を検出したが、古墳に関連する遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第103図　トレンチ掘削状況

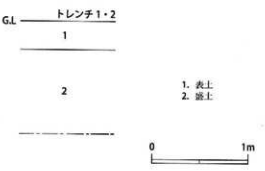


第104図　トレンチ断面図

2008－32　桜塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）7月31日
調査場所：豊中市南桜塚1丁目234－6,7
調査対象面積：85.85㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下120㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第105図　トレンチ掘削状況

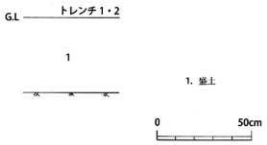


第106図　トレンチ断面図

2008 - 33　桜塚古墳群

調査日：平成 20 年（2008 年）7 月 31 日
調査場所：豊中市南桜塚 2 丁目 82 － 2
調査対象面積：62.25 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下 40 ㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第 107 図　トレンチ掘削状況

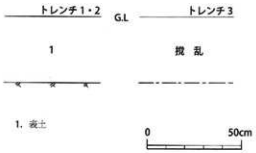


第 108 図　トレンチ断面図

2008 - 34　太鼓塚古墳群

調査日：平成 20 年（2008 年）7 月 31 日
調査場所：豊中市永楽荘 3 丁目 84 － 12
調査対象面積：83.62 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 3 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下 35 ㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第 109 図　トレンチ掘削状況

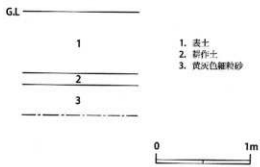


第 110 図　トレンチ断面図

2008－35　北条遺跡

調査日：平成20年（2008年）8月7日
調査場所：豊中市小曽根1丁目1666－3
調査対象面積：106.0㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下110㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第111図　トレンチ掘削状況

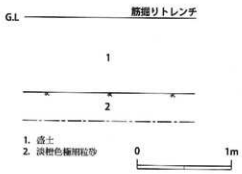


第112図　トレンチ断面図

2008－36　太鼓塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）8月7日
調査場所：豊中市永楽荘3丁目32－6
調査対象面積：63.34㎡
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下約80㎝において基盤層を検出したが、古墳に関連する遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第113図　トレンチ掘削状況

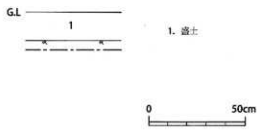


第114図　トレンチ断面図

2008－37　新免遺跡

調査日：平成20年（2008年）8月28日
調査場所：豊中市玉井町1丁目
232－5、233－6
調査対象面積：15.9㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削しトレンチ内を精査、および現状観察を行った。
調査の概要：地表下20㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第115図　トレンチ掘削状況

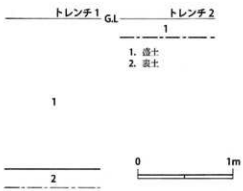


第116図　トレンチ断面図

2008－38　少路遺跡

調査日：平成20年（2008年）8月28日
調査場所：豊中市桜の町5丁目72－22
調査対象面積：40.1㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下180㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第117図　トレンチ掘削状況

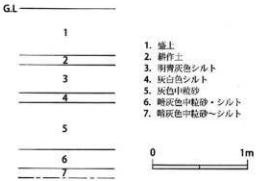


第118図　トレンチ断面図

2008－39　島田遺跡

調査日：平成20年（2008年）8月28日
調査場所：豊中市庄内幸町3丁目84－6
調査対象面積：40.23㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下180㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第119図　トレンチ掘削状況

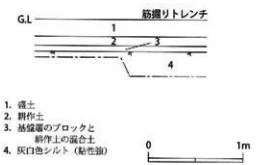


第120図　トレンチ断面図

2008－40　桜塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）9月4日
調査場所：豊中市南桜塚2丁目57－2
調査対象面積：56.05㎡
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下34㎝において基盤層を検出したが、古墳に関連する遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第121図　トレンチ掘削状況

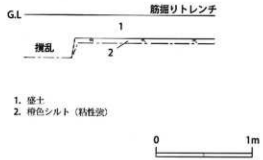


第122図　トレンチ断面図

2008－41　岡町南遺跡

調査日：平成20年（2008年）9月11日
調査場所：豊中市岡町南2丁目6
調査対象面積：79.28㎡
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下25㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第123図　トレンチ掘削状況

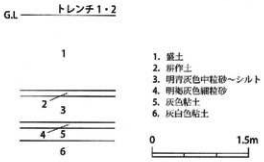


第124図　トレンチ断面図

2008－42　穂積遺跡

調査日：平成20年（2008年）9月18日
調査場所：豊中市服部西町4丁目305－2
調査対象面積：62.5㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下200㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第125図　トレンチ掘削状況

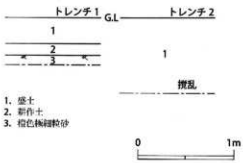


第126図　トレンチ断面図

2008－43　蛍池北遺跡

調査日：平成20年（2008年）9月25日
調査場所：豊中市蛍池北町1丁目75－2
調査対象面積：85.2㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下40～42㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第127図　トレンチ掘削状況

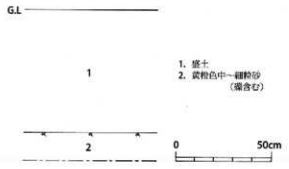


第128図　トレンチ断面図

2008－44　本町遺跡

調査日：平成20年（2008年）9月25日
調査場所：豊中市本町9丁目169－3
調査対象面積：61.36㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下65㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第129図　トレンチ掘削状況

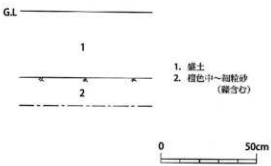


第130図　トレンチ断面図

2008－45　本町遺跡

調査日：平成20年（2008年）9月25日
調査場所：豊中市本町9丁目168－2の一部
調査対象面積：55.89㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下35～40㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第131図　トレンチ掘削状況

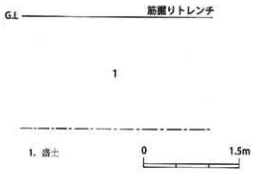


第132図　トレンチ断面図

2008－46　桜塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）10月9日
調査場所：豊中市南桜塚1丁目60－14
調査対象面積：72.28㎡
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下180㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

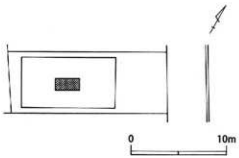
第133図　トレンチ掘削状況



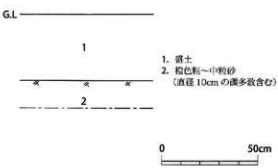
第134図　トレンチ断面図

2008－47　本町遺跡

調査日：平成20年（2008年）10月16日
調査場所：豊中市本町9丁目168－3
調査対象面積：55.08㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下35㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第135図　トレンチ位置図

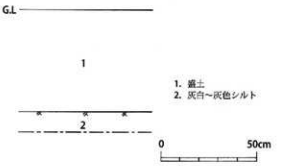


第136図　トレンチ断面図

2008－48　岡町北遺跡

調査日：平成20年（2008年）10月16日
調査場所：豊中市岡町北2丁目140－3
調査対象面積：59.62㎡
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下54㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第137図　トレンチ掘削状況

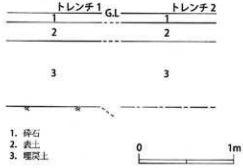


第138図　トレンチ断面図

2008－49　桜塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）10月23日
調査場所：豊中市南桜塚1丁目234の一部
調査対象面積：61.27㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下100㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第139図　トレンチ掘削状況

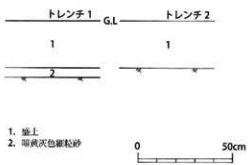


第140図　トレンチ断面図

2008－50　本町遺跡

調査日：平成20年（2008年）10月23日
調査場所：豊中市本町2丁目2－6の一部
調査対象面積：83.63㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：トレンチ1・2において遺構を検出した。
調査後の処置：建物に伴う基礎掘削は遺構面に達しないことから、慎重工事を指示。

第141図　トレンチ掘削状況

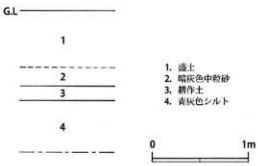


第142図　トレンチ断面図

2008－51　北条遺跡

調査日：平成 20 年（2008 年）10 月 30 日
調査場所：豊中市小曽根 2 丁目 1822 － 2
調査対象面積：42.0 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下 150 ㎝）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第 143 図　トレンチ掘削状況

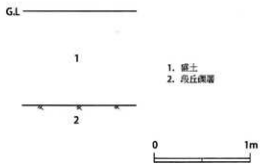


第 144 図　トレンチ断面図

2008－52　本町遺跡

調査日：平成 20 年（2008 年）11 月 13 日
調査場所：豊中市本町 3 丁目 160 － 7
調査対象面積：52.79 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下 100 ㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第 145 図　トレンチ掘削状況

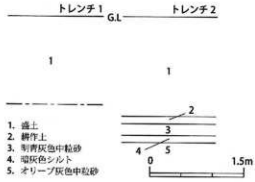


第 146 図　トレンチ断面図

2008－53　北条遺跡

調査日：平成20年（2008年）11月20日
調査場所：豊中市北条町3丁目136－6,19
調査対象面積：74.21㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下200㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第147図　トレンチ掘削状況

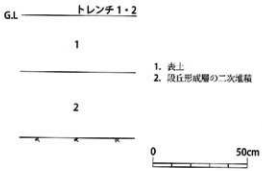


第148図　トレンチ断面図

2008－54　岡町北遺跡・桜塚古墳群

調査日：平成20年（2008年）11月20日
調査場所：豊中市岡町北2丁目148、148－1
調査対象面積：118.42㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下65㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第149図　トレンチ掘削状況

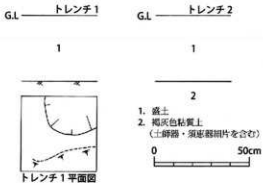


第150図　トレンチ断面図

2008－55　新免遺跡

調査日：平成 20 年（2008 年）11 月 20 日
調査場所：豊中市玉井町 3 丁目 14 － 10
調査対象面積：63.08 ㎡
調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：トレンチ 1 からは柱穴、トレンチ 2 からは土坑又は竪穴住居の可能性が考えられる褐灰色粘質土層を検出した。
調査後の処置：盛土施工により遺構の損壊は免れることから、再立会後、慎重工事を指示。

第 151 図　トレンチ掘削状況

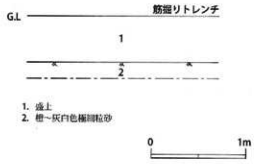


第 152 図　トレンチ平面・断面図

2008－56　桜井谷窯跡群

調査日：平成 20 年（2008 年）12 月 11 日
調査場所：豊中市熊野町 4 丁目
247 － 3,5、249 － 2
調査対象面積：65.04 ㎡
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下 48 ㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第 153 図　トレンチ掘削状況

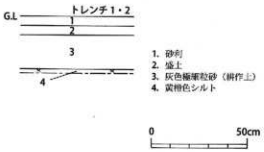


第 154 図　トレンチ断面図

2008－57　新免遺跡

調査日：平成20年（2008年）12月18日
調査場所：豊中市岡上の町3丁目50
調査対象面積：30.23㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：地表下28㎝において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

第155図　トレンチ掘削状況

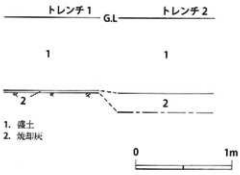


第156図　トレンチ断面図

2008－58　下原窯跡群

調査日：平成20年（2008年）12月25日
調査場所：豊中市南桜塚4丁目93－1
調査対象面積：43.47㎡
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。
調査の概要：掘削深度（地表下80～100㎝）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。
調査後の処置：確認調査後、着工を指示。

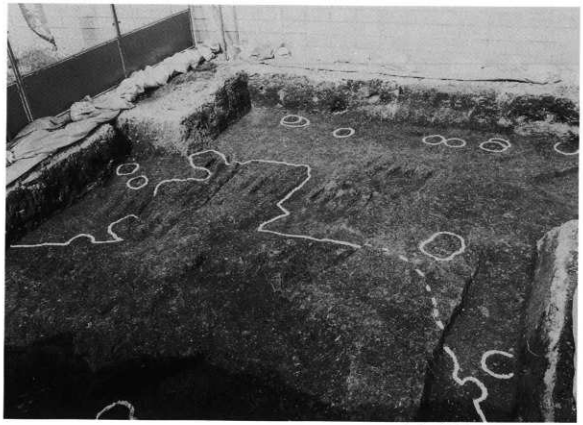
第157図　トレンチ掘削状況



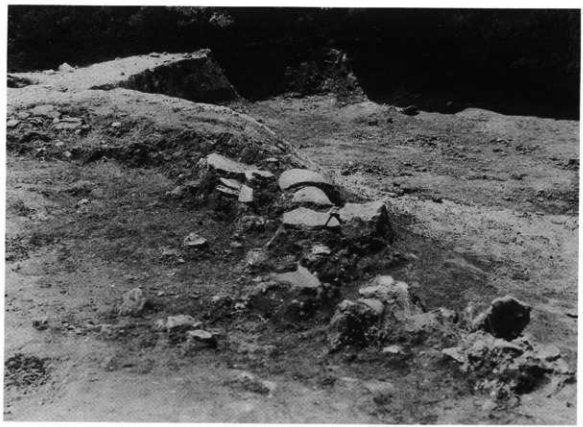
第158図　トレンチ断面図

図　　版

図版 1　新免遺跡第 61 次調査



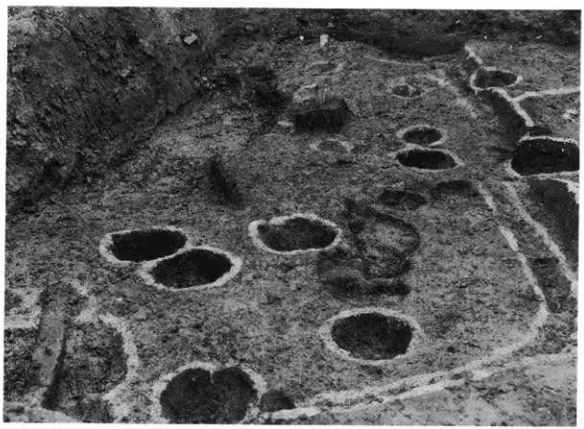
（1）遺構検出状況（東半部）



（2）遺物出土状況（遺物包含層上面）

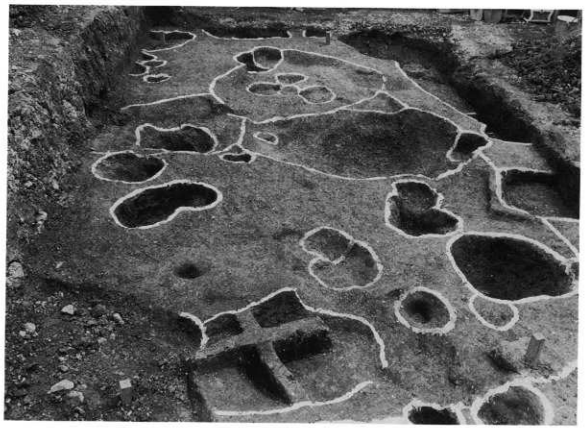
図版 2　新免遺跡第 61 次調査

（1）遺構完掘状況（東端部）



（2）竪穴住居 1 完掘状況（南から）

図版 3　新免遺跡第 61 次調査



（1）遺構完掘状況（西半部）

（2）竪穴住居 1 遺物出土状況

図版4　新免遺跡第61次調査

（1）竪穴住居1埋土堆積状況

（2）竪穴住居1柱穴1断面

図版５　岡町北遺跡第７次調査

（１）調査区全景

（２）井戸１断面

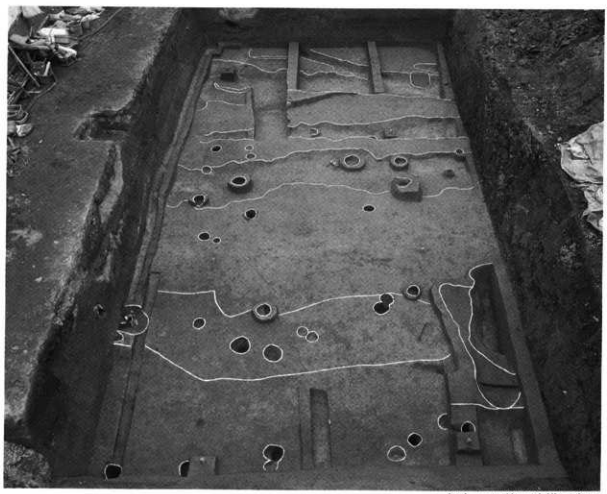
図版 6　岡町北遺跡第 7 次調査

（1）調査区東壁（土坑 1）断面

（2）土坑 1 出土遺物

図版７　庄本遺跡第２次調査

（1）１区第２遺構面全景



（2）２区第２遺構面全景

図版８　庄本遺跡第２次調査

（１）建物１SP ２遺物出土状況１

（２）建物１SP ２遺物出土状況２